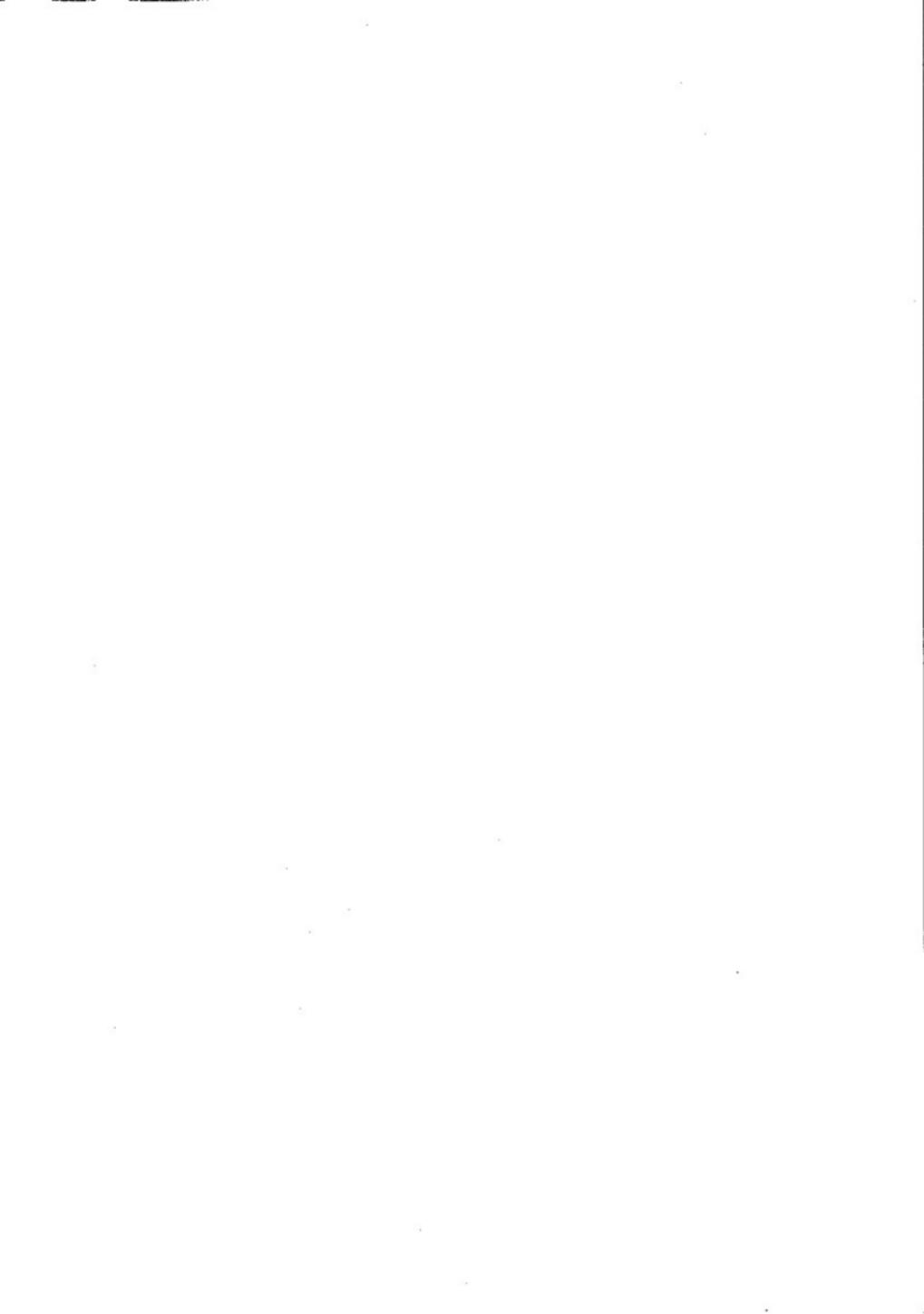


久宝寺遺跡

—八尾市神武町93-1の道路築造工事に伴う久宝寺遺跡第26次発掘調査報告—

2002年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



はしがき

大阪府の東部の一画を占める八尾市は、東に緑豊かな自然を残す生駒山地西麓部を従え、その西側には、旧大和川水系が形成した河内平野が広がっている。このような地形的環境を有する八尾市の歴史は古く、市域の南端に所在する八尾南遺跡では、旧石器時代に遡る遺構・遺物が検出されている。一方、市域の大部分を占める平野部では、今から約2300年前の弥生時代前期から、水田経営を基盤とした集団の遺構・遺物が散見され始める。以後各時代を生きた先入たちは、度重なる洪水の危険に怯えながらも、それに起ち向かい、この脂の乗りきった肥沃な土壤を手放すことにはなかった。近世に至るまで、連縄と遺構・遺物が残されているのはその証である。近年においては、旧国鉄造華操車場跡地において大規模な都市開発が進行しているほか、市民の保健・衛生の向上を図る為、公共下水道の普及にも力を注ぎ、自然と都市型空間との共存を図りながら今尚発展を止めることははない。

この度、平成11年度に実施した久宝寺遺跡第26次調査の整理が完了したため、これをまとめ報告書として刊行する。この調査では、古墳時代後期～近世に至るまでの、先人たちの生活の一痕跡を発見したほか、古墳時代前期～中期頃に洪水を頻繁に繰り返していたと思われる人河川の一部を確認することができた。さらに、この河川の下層には、厚さ約2mを超える粘土層が存在することが判明し、一時期、当地一帯が湿地帯のような環境下にあったことが確認された。このように地中には、私たち現代人が思いもよらぬ自然環境・歴史環境が埋もれているのである。今も市域のどこかで、市民生活の向上のための開発が進行している。それと同時に、先人が残してくれたかけがえのない文化財が破壊されていることもこれまた事実である。文化財は一度破壊されると、二度と元には戻らない。今後とも埋蔵文化財の保護、および否応なく破壊されていく埋蔵文化財に対して、発掘調査を行い、歴史を記録・保存し、21世紀に伝承していくという、私たち(財)八尾市文化財調査研究会の活動により一層のご理解・ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げたい。

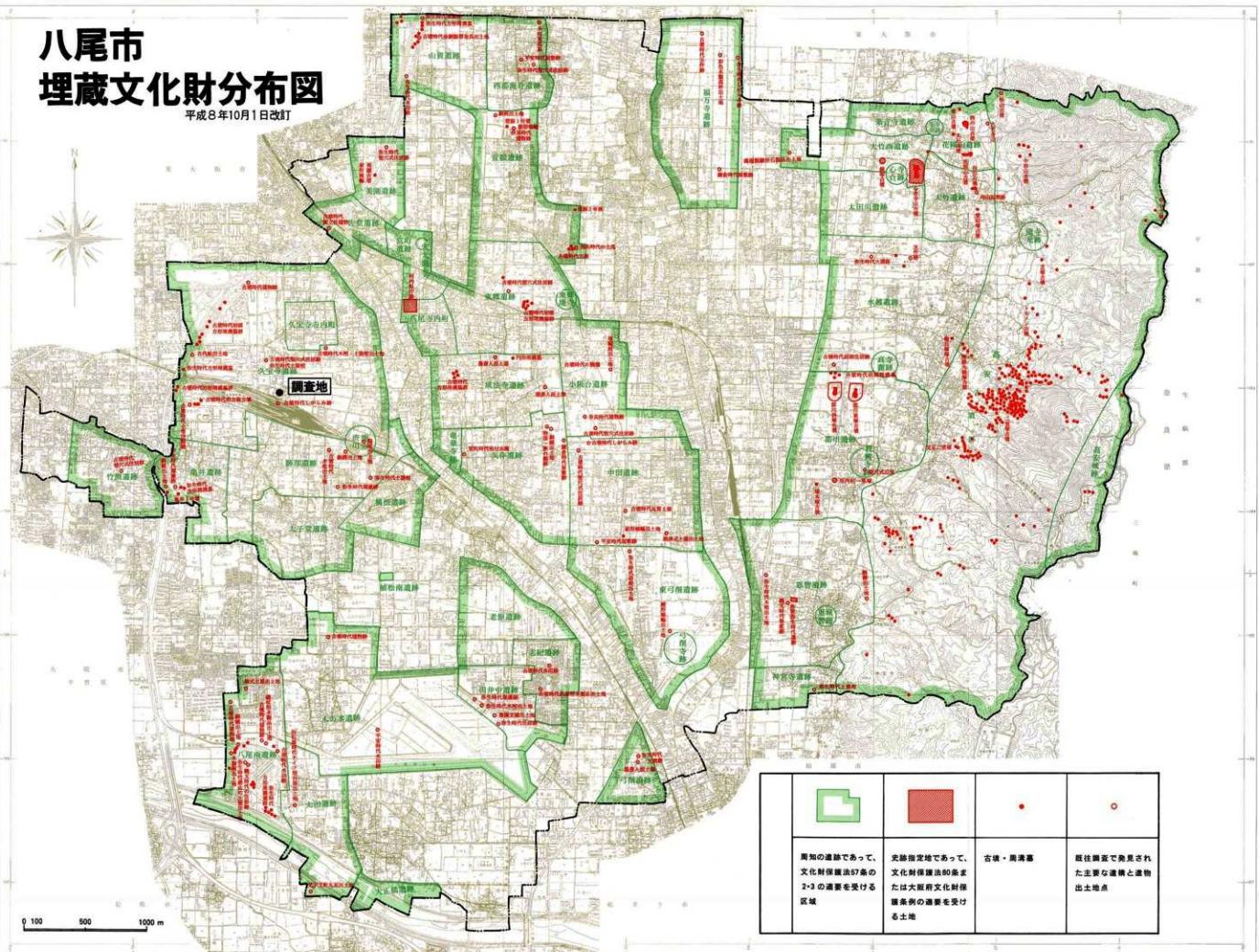
最後になりましたが、一連の発掘調査に対してご協力いただきました関係諸機関の皆様に感謝するとともに、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚くお礼申し上げます。

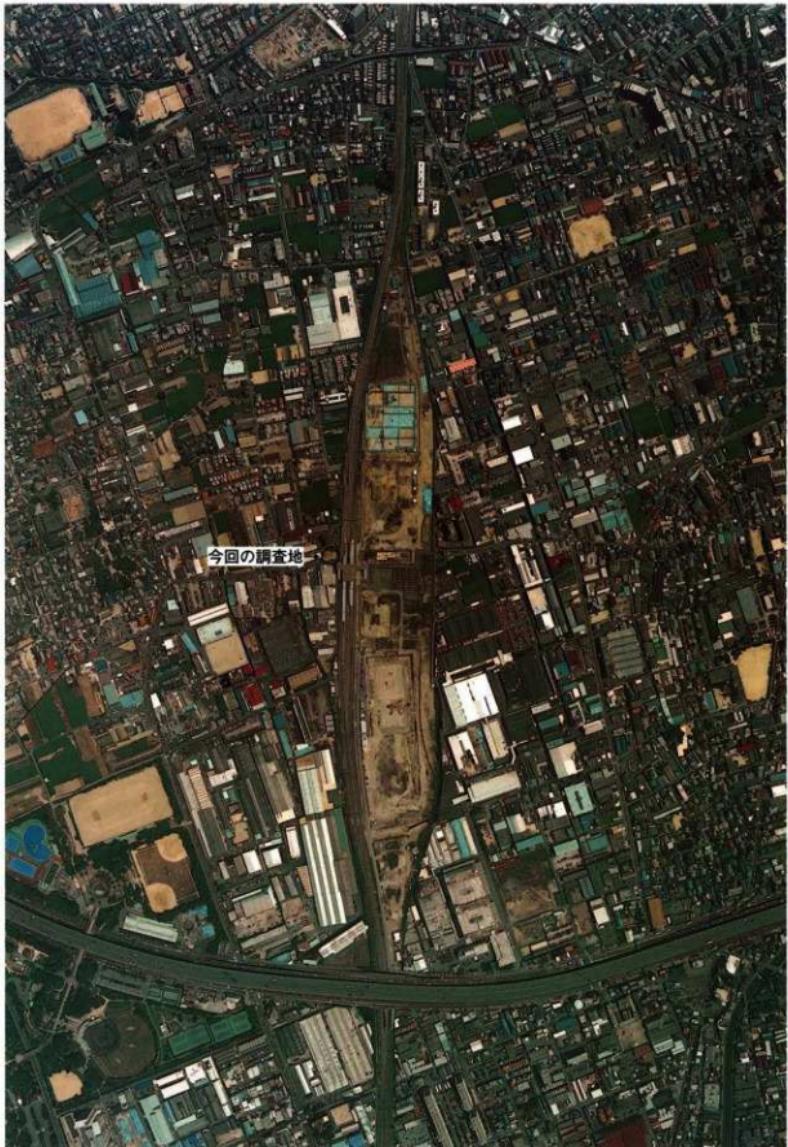
平成13年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会
理事長 木山丈司

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂





今回の調査地とその周辺の航空写真 (左が北: 2000年撮影)



西壁地層断面 第5層 河川内埋土堆積状況



西壁地層断面 第13層～20層堆積状況 (T.P.+3.0～4.0m)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町93-1地内で実施した道路築造工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第26次(KH99-26)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第685号 平成11年2月17日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成11年3月23日~8月20日(実働62日間)にかけて、岡田清一と樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約309m²である。
1. 現地調査にあたっては、下記の方々の参加を得た(敬称略、五十音順)。
市森千恵子、岸田靖子、曹 龍、高橋宏幸、西岡千恵子、松本貴匡
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成11年3月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務については、以下の通りである。

【遺物実測】岡田・田島和恵・宮崎寛子

【図面トレース】岡田・樋口

【遺物写真撮影】樋口

1. 本書の作成にあたっては、岡田・樋口が執筆を行い、文責は目次に記した。
1. 現地調査及び本書作成の過程では、下記の方々から有益な御指導、御教示を賜った。ここに記して感謝の意を表する次第である(敬称略、団体五十音順、団体内五十音順)。
高橋 工・趙 哲濟・松尾裕信・村元健一(以上(財)大阪市文化財協会)、赤木克視、入江正則、後藤信義、小林義孝、佐伯博光、酒井泰子、長田芳子、西村 歩(以上(財)大阪府文化財調査研究センター)、松田順一郎((財)東大阪市文化財協会)
1. 現地調査では、下記の機関に自然科学分析をお願いした。記して感謝の意を表したい。
【花粉分析】水谷陸彦 総合科学株式会社
1. 調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

凡 例

1. 本書で用いた方位は国土座標第VI座標系の座標化を示す。
1. 本書で用いた標高はすべてT.P.（東京湾平均海面）+値(m)である。
1. 本書に掲載した地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図(平成8年7月編纂)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成8年10月1日改訂)を使用した。
1. 遺構名は下記の通りアルファベットで表示し、遺構番号の前に冠した。
土坑—SK、溝—SD、流路—NR、性格不明遺構—SX
1. 遺構番号は、3桁の数字で表記した。上1桁については遺構検出面を示し、以下の桁は遺構の検出番号を表す。
1. 遺構実測図の縮尺は、平面図が1/100と1/200、断面図が1/20と1/40を基調とした。
1. 遺物実測図の縮尺は、土器は1/4に統一したが、その他については適宜縮尺を設定した。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
縄文土器—スクリントーン、弥生土器・土師器—白、その他の土器(つまり須恵器・陶磁器類)—黒、土製品・石製品—斜線
1. なお、本書で使用している土器の器種分類や編年観、年代観については、註釈で説明を加えているのでそちらを参照されたい。
1. 土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編1989『新版標準土色帖9版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修を用いた。
1. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号はすべて一致する。

本文目次

第1章 はじめに	(岡田) ···· 1
第2章 調査概要	6
第1節 調査の方法と経過	(樋口) ···· 6
第2節 基本層序	(樋口) ···· 8
第3節 検出遺構と出土遺物	12
(1) 検出遺構	(岡田・樋口) ···· 12
(2) 出土遺物	(樋口) ···· 17
第3章 調査の結果	(岡田・樋口) ···· 31
第4章 久宝寺遺跡第26次調査(KH99-26)に伴う花粉分析	(水谷) ···· 37

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	2
第2図 調査地周辺図	3
第3図 調査区位置図	7
第4図 地区割り図	8
第5図 地層断面模式図	11
第6図 第1面平面図	13
第7図 第2面平面図	14
第8図 第3面平面図	15
第9図 第4面平面図	17
第10図 S D102・S K201・S K203内出土遺物	21
第11図 S D206内出土遺物	22
第12図 第1層・第2層内出土遺物	22
第13図 第4層~6層内出土遺物①	23
第14図 第4層~6層内出土遺物②	25
第15図 第4層~6層内出土遺物③	26
第16図 第4層~6層内出土遺物④	28
第17図 第4層~6層内出土遺物⑤	29
第18図 第4層~6層内出土遺物⑥	29
第19図 第4層~6層内出土遺物⑦	30
第20図 第7層・第9層内出土遺物	31
第21図 調査位置図	38
第22図 調査地周辺図	39
第23図 調査区平面図	40

第24図 西塙地層断面図	41
第25図 久宝寺遺跡第26次調査 花粉ダイアグラム	43

表 目 次

表1 調査地周辺の発掘調査一覧表	4 ~ 6
表2 検出遺構一覧表その①~その③	18~20
表3 遺構断面形状分類表	34
表4 遺構埋土の着眼点	34
表5 分析重量と花粉化石産出状況	42
表6 久宝寺遺跡第26次調査 産出頻度が低かった花粉化石その①~その②	44 ~ 45
表7 花粉写真対応表	47

写 真 目 次

写真1 花粉化石(1)	49
写真2 花粉化石(2)	50

図 版 目 次

卷頭図版一	今回の調査地とその周辺の航空写真
卷頭図版二	西塙地層断面 第5層 河川内埋土堆積状況 西塙地層断面 第13層~20層堆積状況(T.P. +3.0~4.0m)
図版一	第2面全景(クレーンより撮影) 第4面全景(クレーンより撮影)
図版二	第1面全景(東から) 第1面全景(北から)
図版三	第2面全景(東から) 第2面全景(北から)
図版四	第3面全景(東から) 第3面全景(南から)
図版五	N R 401検出状況(東から) N R 401検出状況(西から)
図版六	西塙地層断面 S K 201埋土堆積状況 西塙地層断面 S K 203埋土堆積状況

- 図版七 西壁地層断面 第4層・第5層堆積状況(T.P.+5.2~6.6m)
第6層下面 グループキャスト検出状況(南から)
- 図版八 西壁地層断面 第7層~10層堆積状況(T.P.+4.0~5.2m)
西壁地層断面 第8層・第9層堆積状況(右の人は第8層下面、左の人は第9層下面の平・断面をそれぞれ指す)
- 図版九 第8層下面 地震痕跡? 検出状況(東から)
第9層下面 地震痕跡? 検出状況(東から)
- 図版十 西壁地層断面 第13層~28層堆積状況(T.P.+2.7~4.0m)
西壁地層断面 第13層~18層堆積状況(T.P.+3.5~4.0m)
- 図版十一 S D 206(7)・第4層~6層(その他)内出土遺物
- 図版十二 第4層~6層内出土遺物
- 図版十三 第4層~6層内出土遺物
- 図版十四 S K 201(2)・第4層~6層(16~19・21・107・109)・第7層(126)・第9層(127)
内出土遺物

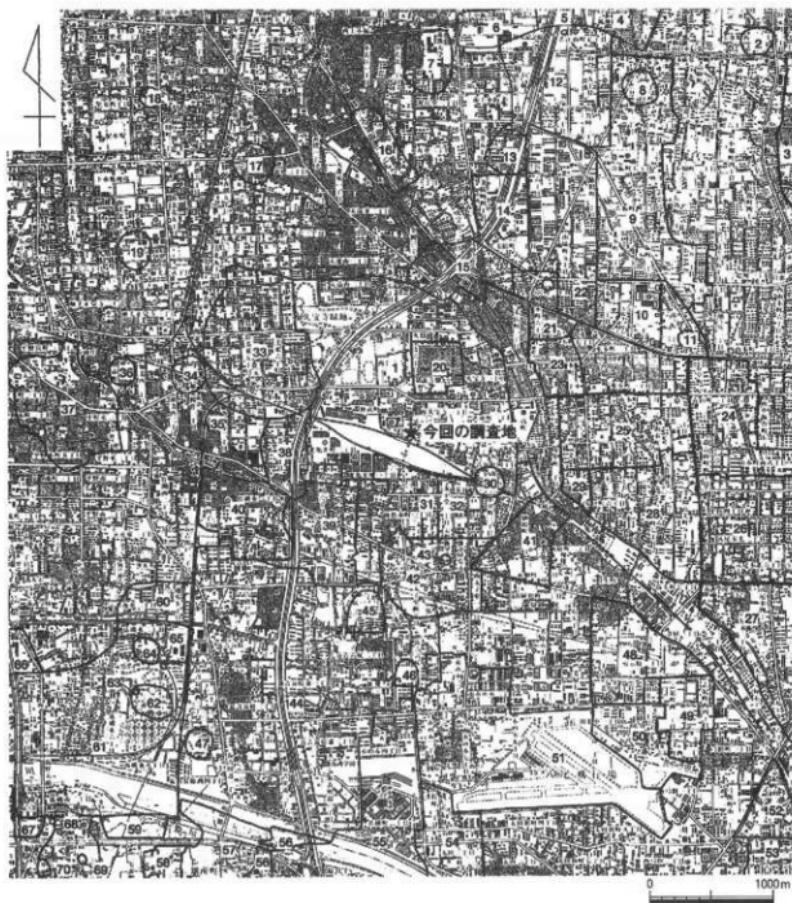
第1章 はじめに

大阪府の東部、現在の人和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす沖積作用によって形成されているが、この豊かな土壌は太古の昔から人々の生活を潤してきた。今回報告する久宝寺遺跡は、この大平野の東部に位置する八尾市の西部および東大阪市の南部、現在の行政区画では久宝寺1～6丁目・北久宝寺1～3丁目・南久宝寺1～3丁目・西久宝寺・神武町・大字龟井・北龟井町1～3丁目・大字渋川・渋川町1～7丁目・跡部北の町および東大阪市大蓮東5丁目・大蓮南2丁目の東西1.8km・南北1.7kmがその範囲と推定されている。この地域では近年、JR久宝寺駅南側に位置する旧国鉄竜華操車場跡地において大開発が進行中であり、近い将来、八尾市の新しい情報発信源として生まれ変わる日が訪れるものと思われる。

さて、久宝寺遺跡は、地形的には長瀬川左岸の低位沖積地に位置するが、このように旧人和川水系が形成した沖積平野には、たくさんの遺跡が密集している。当遺跡周辺だけでも、北に佐堂遺跡、東に宮町遺跡・八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡、南に龟井遺跡・跡部遺跡、西に加美遺跡（大阪市）などが隣接する。これらの遺跡における考古学的な成果は莫大な量であり、先人が残したこれら的情報が、この八尾市はもとより、日本の歴史を解明する上で重要な鍵を握っていることは言うまでもない。

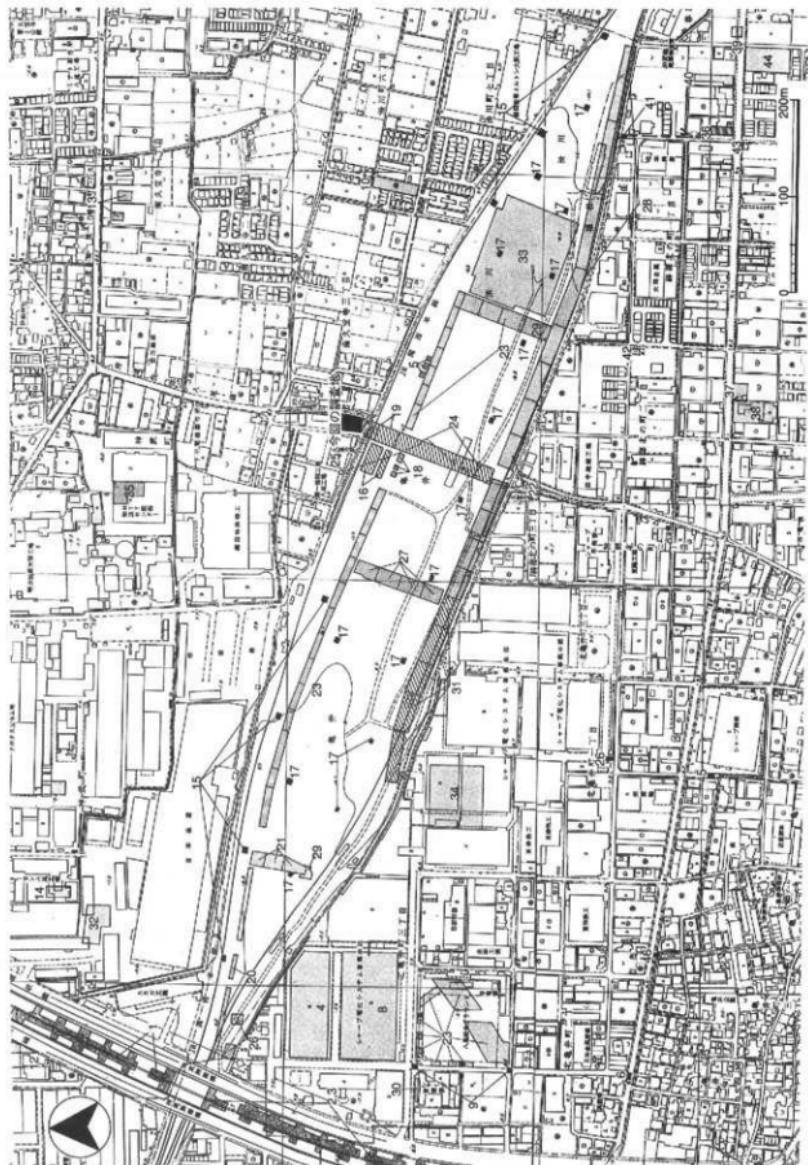
久宝寺遺跡は、昭和10年に今回の調査地から北へ約500m地点の式内社「許麻神社」の西側に位置する小字「西口」・「栗林」で実施された道路工事中に、弥生時代後期の土器や土師器、須恵器、そして丸木舟の残片が出土したことが発見の契機とされる（吉岡1988）。その後、昭和55～61年にかけて（財）大阪文化財センター（現（財）大阪府文化財調査研究センター）によって実施された近畿自動車道建設に伴う発掘調査では、縄文時代晚期～近世にかけての複合遺跡であることが判明した（寺川・金光1987、赤木・松岡・今村1987、一瀬1987）。調査の結果、特筆すべき成果として縄文時代晚期の河川、弥生時代中期～後期の掘立柱建物・方形周溝墓、古墳時代前期の「準構造船」、奈良時代～平安時代の水田遺構などの検出が挙げられる。また、今回の調査地の南側に広がる旧国鉄の竜華操車場跡地内においては、昭和61年7月に八尾市が「竜華操車場跡地の基本構想」を発表し、それに伴う調査が昭和63年以降、（財）大阪府文化財調査研究センター、八尾市教育委員会、当調査研究会によって断続的に実施され、現在も（財）大阪府文化財調査研究センター、当調査研究会によって継続中である。それらの調査の結果、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての居住域や墓域、古墳時代後期の横穴式石室を有する古墳、飛鳥時代の地盤痕、奈良時代～平安時代までの居住域、中世の生産域などが見つかっている。

この内、本調査地に隣接する地点での既往調査の成果を概観していくと、平成7～9年に本調査地の南側で実施された（財）大阪府文化財調査研究センターによる調査では、古墳時代の河川、古墳時代中期に構築された壠、古墳時代後期の掘立柱建物、中世の島畑及び道路状遺構などが検出されている（後藤・本田1996、後藤・島崎・長田1998a）。以下、主な成果を時代順に列記していくと、古墳時代前期～中期には、大規模な河川が存在したようである。この河川は、層厚約



- | | | | | | |
|------------|-----------|------------|---------------|----------|-----------|
| 1 久宝寺遺跡 | 13 友井東遺跡 | 25 成法寺遺跡 | 37 平野環濠都市 | 49 志紀遺跡 | 61 瓜破遺跡 |
| 2 玉串遺跡 | 14 美園遺跡 | 26 中田遺跡 | 38 鶴井北(加美南)遺跡 | 50 田井中遺跡 | 62 瓜破鬼寺 |
| 3 池島・福万寺遺跡 | 15 佐堂遺跡 | 27 東弓削遺跡 | 39 亀井遺跡 | 51 木の本遺跡 | 63 ゴマ堂山古墳 |
| 4 若江遺跡 | 16 弥刀遺跡 | 28 矢作遺跡 | 40 竹瀬遺跡 | 52 弓削遺跡 | 64 成本鬼寺 |
| 5 若江北遺跡 | 17 衣原遺跡 | 29 寺垂寺遺跡 | 41 植松遺跡 | 53 本郷遺跡 | 65 花屋山古墳 |
| 6 上小阪遺跡 | 18 西郷遺跡 | 30 清川庵寺 | 42 太子堂遺跡 | 54 太田遺跡 | 66 瓜破北遺跡 |
| 7 小石江遺跡 | 19 加美北遺跡 | 31 鶴部遺跡 | 43 勝麻寺遺跡 | 55 八尾南遺跡 | 67 三宅西遺跡 |
| 8 西郡寺遺跡 | 20 久宝寺寺内町 | 32 鶴部銅鐸出土地 | 44 長原遺跡 | 56 大城遺跡 | 68 三宅遺跡 |
| 9 重御遺跡 | 21 富可遺跡 | 33 加美遺跡 | 45 城山古墳群 | 57 別所遺跡 | 69 三宅古墳群 |
| 10 東郷遺跡 | 22 穴太廻寺 | 34 長楽庵寺 | 46 六尺古墳群 | 58 藏置遺跡 | 70 椿原山古墳群 |
| 11 東郷廻寺 | 23 八尾寺内町 | 35 鞍作庵寺 | 47 長吉野山遺跡 | 59 三宅家遺跡 | |
| 12 山賀遺跡 | 24 小坂合遺跡 | 36 平野寺前遺跡 | 48 牛原遺跡 | 60 宮道東遺跡 | |

第1図 周辺遺跡分布図 (S = 1/40000)



第2図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

表1 調査地周辺の発掘調査一覧表（番号は第2図に対応する）

番号	調査名(略称)	調査期間	所在地	調査範囲	文 部 省
1	久宝寺南 (その2) センター	神武町 S57/7/5～ S60/6/30	府教委 神武町	赤木京視・一瀬和夫 1987「久宝寺南(その2)」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター	
2	龜井北 (その1)	◆ 大阪市平野区 加美南4丁目他 S59/3/1～ S61/3/31		小野久蔵・服部文章 1985「龜井北(その1)」八尾市文化財調査研究会報告37(財)八尾市文化財センター	
3	龜井北 (その2)	◆ 大阪市平野区 加美南4丁目 S59/3/1～ S61/1/16		奥利之・山上弘 1986「龜井北(その2)」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター	
4	久宝寺1次 (KH84-1)	八文研 北龜井町3丁目 S59/4/2 ～5/26		原田昌樹 1993「Ⅲ 久宝寺遺跡第1次調査(KH84-1)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(財)八尾市文化財調査研究会報告37」(財)八尾市文化財調査研究会	
5	久宝寺4次 (KH90-4)	◆ 龜井・浜川 H2/4/2 ～6/12		坪田真一 1993「久宝寺遺跡第4次調査(KH90-4)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告III」(財)八尾市文化財調査研究会報告41(財)八尾市文化財調査研究会	
6	久宝寺3次 (KH90-5)	◆ 北龜井町2丁目 H2/4/15 ～4/22		高萩千秋 1991「Ⅰ 久宝寺遺跡(KH90-5)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告32」「(財)八尾市文化財調査研究会	
7	久宝寺6次 (KH90-6)	◆ 神武町17・20 ～27・38他 H2/9/3 ～10/12		原田昌樹 1993「Ⅲ 久宝寺遺跡第6次調査(KH90-6)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(財)八尾市文化財調査研究会報告37」「(財)八尾市文化財調査研究会	
8	久宝寺9次 (KH91-9)	◆ 北龜井町3丁目 1～72 H3/8/1 ～12/3		成海佳子 1992「13. 久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)」「子成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」「(財)八尾市文化財調査研究会	
9	久宝寺10次 (KH91-10)	◆ 北龜井町2・3 丁目 H3/10/2 ～10/22		原田昌樹 1992「Ⅰ 久宝寺遺跡第10次調査(KH91-10)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(財)八尾市文化財調査研究会報告34」「(財)八尾市文化財調査研究会	
10	久宝寺11次 (KH91-11)	◆ 浜川町6丁目 34・35 H3/10/7 ～10/18		西村公助 1992「Ⅱ 久宝寺遺跡第11次調査(KH91-11)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告34」「(財)八尾市文化財調査研究会	
11	久宝寺13次 (KH91-13)	◆ 神武町2-35 H3/12/15 ～H4/1/23		西村公助 1992「17. 久宝寺遺跡第13次調査(KH91-13)」「平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」「(財)八尾市文化財調査研究会	
12	久宝寺14次 (KH92-14)	◆ 神武町190-1 H4/5/26 ～8/10		坪田真一 1993「10. 久宝寺遺跡第14次調査(KH92-14)」「平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」「(財)八尾市文化財調査研究会	
13	久宝寺17次 (KH93-17)	◆ 久宝寺1丁目40 H5/7/19 ～7/30		岡田清一 1997「Ⅱ 久宝寺遺跡(第17次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告53」「(財)八尾市文化財調査研究会	
14	久宝寺18次 (KH94-18)	◆ 神武町143～ 146他 H6/9/1 ～10/12		坪田真一 1995「8. 久宝寺遺跡第18次調査(KH94-18)」「平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」「(財)八尾市文化財調査研究会	
15	久宝寺 (95-1～7レンチ)	◆ センター 龜井・浜川 H7/5/24 ～12/20		本間元樹・山門賀治 1996. 3 「八尾市龜井・浜川所在久宝寺遺跡・竜串地区発掘調査報告」「(財)大阪府文化財調査研究センター報告書第5集」「(財)大阪府文化財調査研究センター報告書第6集」「(財)大阪府文化財調査研究センター報告書第7集」	
16	久宝寺 (95-8・9・9レンチ)	◆ 龜井 H7/5/23 ～12/20		後藤信義・本田幸都子 1996. 3 「八尾市龜井所在久宝寺遺跡・竜串地区発掘調査報告」「J R久宝寺駅舎・白山通路設置に伴う」「(財)大阪府文化財調査研究センター報告書第6集」「(財)大阪府文化財調査研究センター報告書第7集」	
17	久宝寺 (95-565)	市教委 浜川・龜井 H8/1/9 ～7/12		藤井淳弘・吉田珠己 1997「7. 久宝寺遺跡(95-565)の調査」「八尾市内重熱8年度発掘調査報告Ⅱ」「八尾市文化財調査報告37」「八尾市教育委員会	
18	久宝寺 (KH96-20)	八文研 浜川 H8/9/26 ～11/14		坪田昌樹 2000「Ⅲ 久宝寺遺跡第20次調査(KH96-20)」「(財)八尾市古文化財調査研究会報告66」「(財)八尾市文化財調査研究会報告67」	
19	久宝寺 (96-1-97-1 トレンチ)	◆ センター 浜川 H8/2/1 ～ H10/3/31		後藤信義・岡崎恵志・長田芳子 1998. 3 「八尾市浜川所在久宝寺遺跡・竜串地区発掘調査報告書Ⅲ」「一般府道往古八尾駒付け材史乘に伴う染紙調査」「(財)大阪府文化財調査研究センター報告書第26集」「(財)大阪府文化財調査研究センター報告書第27集」	
20	久宝寺22次 (KH97-22)	八文研 龜井 H19/10/29 ～ H10/1/13		原田昌樹 2001「久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書」「大阪電気軌道地区区间道路2号線に伴う」「(財)八尾市文化財調査研究会報告68」「(財)八尾市文化財調査研究会報告69」	

番号	調査名(略)	調査機関	所在地	調査期間	文 件 目 録
21	久宝寺23次 (K H97- 23)	八文研	龜井・渋川	H9/10/23 ~ H10/6/30	原田晶氏・古田珠己・岡田清一・古川暁久・鶴山 嘉 1999「8. 久宝寺遺跡第23次調査(K H97- 23)」『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』(財)八尾市文化財調査研究会
22	久宝寺24次 (K H98- 24)	*	龜井・渋川	H10/2/10 ~ H11/2/20	原田晶氏・廣瀬・坪田真一・吉川暁久・鶴山 嘉「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書—大阪堺東部網点施設区発祥東西3工区の発掘工事に伴う—」【別】八尾市文化財調査研究会報告書69】(財)八尾市文化財調査研究会
23	久宝寺25次 (K H98- 25)	*	北龜井町3丁目	H11/1/28 ~7/15	原田晶氏・坪田真一・森本めぐみ・吉川暁久 1999「10. 久宝寺遺跡第25次調査(K H97- 25)」『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
24	久宝寺 (98-1-98-2)	センター	渋川	H10/3/16 ~ H11/1/14	赤木克典・秋山浩三・酒井泰子・西村 多恵 2001「八尾市渋川所在久宝寺遺跡、鬼塚地区発掘調査報告書目」【別】大阪府文化財調査研究センター調査報告書第60集】(財)大阪府文化財調査研究センター
25	今回の調査地 (K H99- 26)	八文研	神武町93-1	H11/3/23 ~8/20	本報告書
26	久宝寺27次 (K H99- 27)	*	北龜井町3丁目 1-72	H11/5/17 ~7/21	西村公助 2000「14. 久宝寺遺跡第27次調査(K H99- 27)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書』(財)八尾市文化財調査研究会
27	久宝寺28次 (K H99- 28)	*	龜井	H11/9/1 ~ H12/3/10	西村公助・岡田清一 2000「11. 久宝寺遺跡第28次調査(K H99- 28)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書』(財)八尾市文化財調査研究会
28	久宝寺29次 (K H99- 29)	*	渋川	H11/9/1 ~	半田真一・岡田清一・猪口 嘉・小川裕子 2000「12. 久宝寺遺跡第29次調査(K H99- 29)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書』(財)八尾市文化財調査研究会
29	久宝寺30次 (K H99- 30)	*	龜井・渋川	H12/1/20 ~3/17	森田高朗・西村公助・岡田清一 2000「13. 久宝寺遺跡第30次調査(K H99- 30)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書』(財)八尾市文化財調査研究会
30	久宝寺31次 (K H99- 31)	*	龜井	H12/2/8 ~3/30	西村公助 2000「14. 久宝寺遺跡第31次調査(K H99- 31)」【別】八尾市文化財調査研究会報告65】(財)八尾市文化財調査研究会
31	久宝寺 (99-1-5)	センター	龜井	H11/3/2 ~12/24	未報告
32	久宝寺32次 (K H99- 32)	八文研	神武町138地	H12/3/13 ~6/8	森本めぐみ 2000「15. 久宝寺遺跡第32次調査(K H99- 32)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書』(財)八尾市文化財調査研究会
33	久宝寺33次 (K H00- 33)	*	渋川	H12/3/31 ~ H13/2/28	成藤雅子・猪口 嘉・金城満夫 2001「4. 久宝寺遺跡第33次調査(K H2000- 33)」【学成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書】(別)八尾市文化財調査研究会
34	久宝寺34次 (K H00- 34)	*	北龜井町3丁目 41	H12/7/18 ~11/25	猪口 嘉 2001「5. 久宝寺遺跡第34次調査(K H2000- 34)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書』(財)八尾市文化財調査研究会
35	久宝寺35次 (K H00- 35)	*	神武町1番79	H12/10/16 ~11/14	森本めぐみ 2001「6. 久宝寺遺跡第35次調査(K H2000- 35)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告書』(財)八尾市文化財調査研究会
36	跡部 (S56調査)	市教委	春日町1丁目57	S56/11/9 ~11/19	高木亮光 1983. 3 「第6章 跡部遺跡発掘調査結果報告」【八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書(1980- 1981)】八尾市教育委員会
37	跡部 (AT82-1)	八文研	跡部本町1丁目 3	S57/10/1 ~10/5	S57/10/1 「西村公助 1983「11. 跡部遺跡」『昭和57年度における鬼藏文化財発掘調査—その成果と概要—』八尾市教育委員会
38	跡部 (AT88-4)	*	跡部本町1丁目 4-1	S63/10/1 ~10/22	西村公助 1989「19. 跡部遺跡(第4次調査)」【八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度】(財)八尾市文化財調査研究会報告25】(財)八尾市文化財調査研究会
39	跡部 (AT89-5)	*	春日町1丁目 45-1	H1/10/16 ~11/30	安井正三郎 1991「跡部遺跡発掘調査報告—大庭治八尾市春日町1丁目出土銅鏡—」(財)八尾市文化財調査研究会報告31】(財)八尾市文化財調査研究会
40	普基 (AT82- 7)	*	春日町1丁目 47- 48	H4/7/9 ~8/10	浜田昌明 1993「I 跡部遺跡(AT82- 7)第7次調査」【八尾市埋蔵文化財調査報告書】(財)八尾市文化財調査研究会報告39】(財)八尾市文化財調査研究会

番号	調査名(略号)	調査範囲	所在地	調査期間	文 化 財
41	跡部 (AT92-9)	八文柄	春日町1丁目	H4/10/7 ~10/13	黒田昌則 1993「Ⅰ跡部遺跡第9次調査(AT92-9)」『八尾市埋蔵文化財 発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39』(財)八尾市文 化財調査研究会
42	跡部 (AT93-14)	*	跡部北の町1丁 目	H5/11/18 ~12/10	高橋千秋 1994「Ⅰ跡部遺跡第14次調査(AT93-14)」『(財)八尾市文化 財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
43	跡部 (AT94-17)	*	太子堂1丁目	H6/9/16 ~11/18	成海佳子 1997「2. 跡部遺跡第17次調査(AT94-17)」『(財)八尾市文 化財調査研究会報告58』(財)八尾市文化財調査研究会
44	跡部 (AT96-23)	*	春日町4丁目4 番	H19/2/21 ~3/31	畠田昌則 1997「2. 跡部遺跡第23次調査(AT96-23)」『平成8年度 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
45	跡部 (AT98-28)	*	跡部本町4丁目	H10/6/29 ~7/6	森本めぐみ 2000「Ⅰ跡部遺跡第28次調査(AT98-28)」『平成11年度 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
46	龜井 (KM96-4)	*	龜井町1・2丁 目	H6/2/12 ~2/21	古川鴻久 1998「V龜井遺跡 第4次調査(KH96-4)」『(財)八尾市文 化財調査研究会報告58』(財)八尾市文化財調査研究会

調査機関
府教委: 大阪府教育委員会 センター: (財)大阪府文化財センター
市教委: 八尾市教育委員会 八文柄: (財)八尾市文化財調査研究会

2.1~3.4mの砂礫で充填されており洪水の凄まじさを物語る。河川内からは、古墳時代中期に構築されたと考えられる堰が検出された。堰は「合掌型」と呼ばれるもので、部材には二股木が用いられており、高さ約0.8m、全長は40mを超える。おそらく、周辺に存在したと思われる水田に取水するための施設と推測されるが、この堰の規模からは、かなり広範囲に水田が広がっていた可能性を彷彿させる。その後、この河川が埋没した後、掘立柱建物が検出されているように、居住域を形成した可能性も考えられるが、明確なことは分かっていない。中世以降は、生産域として利用されていたようで、道路状遺構に規制を受けた水田を検出している。道路状遺構は久宝寺村と竜華村を繋ぐもので、その初現は出土遺物から鎌倉時代まで遡るものと報告されている。一方、当調査地から東へ約50mの地点では、昭和61年に八尾市教育委員会が遺構確認調査を実施しており(米田1990)、ここでは、現地表下1.4mのところで7世紀の居住域を示唆する小溝・小穴を検出している。

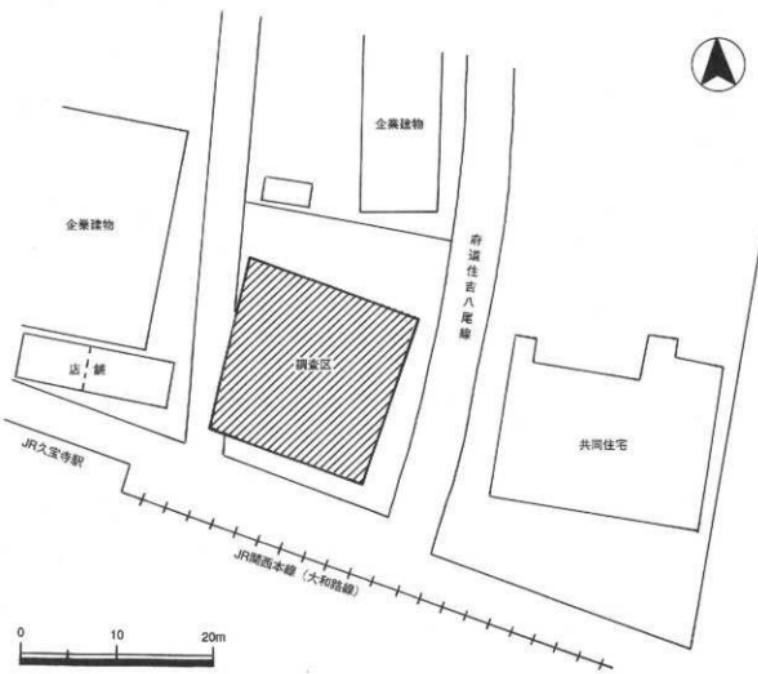
第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は道路整備工事に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施する第26次調査にあたる。本調査地はJR久宝寺駅の北東約10mの地点に位置し、その平面形状は東西約16~18m、南北約18mの南辺が短い不定台形を呈する。調査面積は約309m²である。

調査は八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表(T.P.+8.6m前後)下0.6m前後までを機械掘削とし、以下現地表下5.9m(T.P.+2.7m)前後までの5.3mを人力で掘削、平面的な調査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。なお本調査では、南側にJR西日本大和路線が東西に走り、また西接して一般道住吉八尾線が南北に縱走しており、民家や工場も多いことなどの理由から、安全面を考慮して調査地の4辺に鋼矢板を打設した。

調査においては、遺構平面図の作成や遺物の取り上げの際、遺構・遺物の絶対的位置を示す



第3図 調査区位置図 ($S = 1/500$)

必要が求められる。そこで本調査では、平成9年から旧国鉄竜華操車場跡地内で断続的に行われている八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業に伴う発掘調査で用いられている地区割り方法を採用し、これに備えた。この地区割りは、旧国鉄竜華操車場を中心とした東西2km、南北1kmについて国土座標第VI系を基準として区画したもので、これによると本調査地はⅧ-2-7 I・8 I・8 J・9 H・9 I・9 J地区の範囲に包括される。

遺構の平面実測については、クレーンによる写真測量と平板実測を併用して行った。また、必要に応じて遺物出土状況図の作成も心掛けた。遺構の断面図についても例外を除いてすべて図化した。一方、検出遺構や出土遺物の相対的な新旧関係を明確にするために、あるいは同時期における平面的な広がりを把握するために、地層観察は有効な手段である。したがって本調査では、(財)東大阪市文化財協会の松田順一郎氏、(財)大阪市文化財協会の趙 哲済氏をはじめとする八尾市周辺で活躍されておられる考古学研究者に、ご指導・ご教授を賜り、調査に反映させることを試みた。

調査の結果、4面(第1面～第4面)で遺構を検出したほか、3回もの地震の痕跡や、地層の時

期を決定付けるのに有効な鍵層となる6層におよぶ暗色帯を確認した。出土遺物は遺物収納用コンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)7箱を数える。

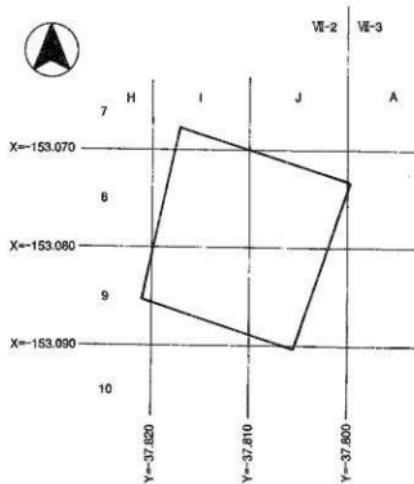
第2節 基本層序

本調査地の発掘調査開始直前の状況は、ほぼ平坦に整地が行われ、既存の構築物等はまったく存在していなかった。それ以前は二輪車用駐輪場としてJR久宝寺駅を利用する多数の市民に利用されていたようである。現地表面の標高は約8.6mを測る。

さて、調査では八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表(T.P.+8.6m)下1.3~1.4m前後に存在するであろう遺物包含層上面までを機械掘削とし、以下、工事による最終掘削深度である現地表下6.3m(T.P.+2.7m)前後までの4.5~4.6mについては人力掘削

を行う予定であった。しかし、現地表下0.8m前後において、近世~近代に相当する地層を確認し、現代に被ったと思われる搅乱層が比較的浅いことが判明、その段階で調査担当者は、当初想定していなかった遺構・遺物が存在する可能性があるとし、任意で地層観察用のトレンチを設定、古代~近世に相当すると思われる堆積状況を調査した。その結果、現地表下0.9m前後、および現地表下1.0m前後において遺構の存在を確認した。このことを受け、本調査では現地表下0.8m前後から人力掘削を実施した。以下、現地表下1.3m(T.P.+7.3m)前後においては、河川の堆積作用によりもたらされた砂礫層を検出した。この砂礫層は約2.2mの層厚を測る。この砂礫層は、ラミナ構造などから考察すると、大きく3時期に区分することができそうである。これより下層については、粘土~シルト質粘土優勢の水平堆積が調査¹全域で認められ、基本的には後背湿地のような静水域を呈する環境であったと推測される。なお、本調査では、最終掘削レベル付近において、人为的に搅拌を受けたと思われる地層が認められたことから、さらに下層に遺構が存在する可能性があると判断し、今後のデータ蓄積を兼ねて現地表下5.9~6.3m(T.P.+2.3~2.7m)部分の地層を観察し、その部分の図化と写真撮影および古環境復元の試金石として土壤サンプルの採取を実施した。

以上のことと踏まえ、本調査では、現地表下0.8m(T.P.+7.8~8.6m)前後に存在する搅乱および客土層を第0層とし、以下、現地表下0.8~6.3m(T.P.+2.3~7.8m)の5.5m内において普遍的に存在する29層を抽出して基本層序とした。以下、各層について概説する。



第4図 地区割図(S = 1/500)

- 第0層** 客土・盛土層である。本地層は、調査地の東方と西方ではその質が異なる。東方の客土・盛土層は調査区に東接する南北に伸びる地下道建設に伴うものである。層厚約0.8m。
- 第1層** 7.5Y4/1灰色粗粒砂～中疊混シルト質粘土。ブロック土を多く含む地層で、人工的に盛ったものと思われる。上方部分は耕作を被ったためか攪拌が著しく、しかも粘性に富む。近世～近代の島畠101盛土である。島畠上面では、現代に比定される遺構(搅乱)を検出した(第1面)。層厚約0.1m。
- 第2層** 2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂混シルト～細粒砂。雲状のマンガンを多く含む。本層上方は土壤化の影響が非常に強く縮まっている。本層上面において、奈良時代～近世に比定される遺構群を検出した(第2面)。層厚約0.1m。
- 第3層** 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～細粒砂。上方においては雲状のマンガンを多く含む。下層の河川が埋没し、その後土壤化の影響が及んだ部分が本層に相当する。本層上面では、古墳時代後期に比定される遺構群を検出した(第3面)。層厚約0.3m。
- 第4層** 5Y5/3灰オリーブ色～2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～疊疊。古墳時代前期～中期に埋没したと推測される河川の埋土である。地層の断面観察では、トラフ型斜行ラミナが顕著に認められる。ラミナの傾きなどから勘案すると、ほぼ南～北に流向をもつ河川であったと推測される。層厚は約1.5mを測る。
- 第5層** 7.5Y4/1灰色シルト～細粒砂。古墳時代前期～中期に埋没したと推測される河川の埋土である。植物遺体をラミナ状に含み、拳大～人頭大の粘土ブロックが混入する地層である。この粘土ブロックは、北壁と西壁でのみ観察されるが、それらからこの粘土ブロックを含む河川内埋土の分布範囲を平面的に復元すると、おおよそ南西～北東方向に流向をもつ河川であったと推測される。当河川の上流にあたると思われる地点では、平成8～9年にかけて(財)大阪府文化財調査研究センターが96-1トレンチ・97-1トレンチの調査を実施し、古墳時代前期～中期に埋没したと思われる河川内から堰を検出している(後藤・島崎1998b)が、今回本調査地で確認されたこの粘土ブロックとの有機的な関係を垣間見ることができそうである。なお、(財)大阪府文化財調査研究センターの検出した堰はシルト層に構築されており、堰を構成する二股木や縦杭を打設することによって粘土ブロックが生じたとは考えられず、したがって、堰が構築された河川を中心とした周辺の開発により供給されたものと推測される。層厚は約0.6mを測る。
- 第6層** 2.5GY4/1暗オリーブ灰色～7.5GY5/1緑灰色粘土質シルト～細粒砂。粘土質シルト～細粒砂で形成されたラミナ層である。有機腐植物もラミナ状に含む。ラミナの傾きは、多少掘れが認められるがほぼ水平といえる。一方粒度組成については、南方では有機腐植物を多く含む粘土質シルトが優勢であるが、北方に向かうにつれて粗粒化しシルトが顕著になる。本層は第7層の上面を削っているため、第7層上面にはグループキャストが形成されていた。グループキャストは、ほとんどのものが南～北方向に伸びている。本層は河川内を充満した埋土というよりは、自然堤防を越えて後背湿地内に流れ込んできた溢流堆積物の可能性が高い。層厚は約0.1m。
- 第7層** 7.5Y4/1灰色粘土。有機腐植物がラミナ状に入る粘土層である。静水域で形成された湿地性の堆積層である。本層は、本調査地の南西方向に存在すると思われる河川および自然

堤防と有機的な関係にある後背溝地に形成された地層といえる。層厚は約0.2mである。

- 第8層 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。地震の痕跡が認められる地層である²¹。本層上面は、地震動によって小さな炎のように粘土が巻き上がっている。一方下面については、地震動により本層下層に当たる第9層上面にひび割れが生じ、その隙間に本層を構成する粘土が入り込む様子が認められる。なお、地震の発生時期については、本層の形成途中と推定され、しかも当時の環境は湿地帯のような静水域であったと思われる。層厚は約0.1m。

【地震①】

- 第9層 5Y3/1オリーブ黒色粘土。地震の痕跡が認められる黒色粘土層である。本層の形成過程については第8層と同じである。しかし、本層から推測される古環境については、上層に比べ有機腐植物を多量に含むことから、より浅い静水域であったと思われる。層厚は約0.1m。【地震②】

- 第10層 7.5GY4/1暗緑灰色粘土。夾雜物をほとんど含まないピュアな粘土層である。滞水状態で形成された地層である。層厚は約0.3mを測る。

- 第11層 5Y4/1灰色粘土。第10層同様、夾雜物をほとんど含まないピュアな粘土層である。本層上面は起伏が激しい。これは、第8層・第9層同様、地震動が起源のものなのか、踏み込み痕のように人為的なもののかは不明である。本層の形成時の環境は滞水域であったと思われる。層厚は約0.2m。

- 第12層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。植物遺体をラミナ状に含む粘土層である。本層も第8層同様、上面・下面ともに起伏が激しい。ただし、下面については第8層などと比較すると直線的ではないため、地震動が起源のものは不明である。あるいは下層の微地形に左右されて起伏が生じたのかもしれない。層厚は約0.1m。

- 第13層 5Y4/1灰色粘土。植物遺体をラミナ状に含む粘土層である。炭酸カルシウムの顆粒も認められる。本層は、湿地帯を呈する環境下で形成された堆積層である。層厚は約0.3m。

- 第14層 7.5Y4/1灰色粘土。植物遺体や炭酸カルシウムの顆粒を含み、また下層にあたる第15層のブロックを多く含む地層である。ブロックの大きさは1～3mmと細かく、しかも丸みを帯びている。カニなどの生物擾乱により形成されたブロックと思われる。層厚は約0.1m。

- 第15層 5Y3/1オリーブ黒色粘土。下層の第16層が巻き上がりブロック状に混入する地層である。ブロックの大きさは第14層と同規模であるが、混入する量は極めて多い。このブロックは、土壤化に伴い、人為的に形成されたものというよりは、生物擾乱により生じたものの可能性が高い。層厚は約0.1m。

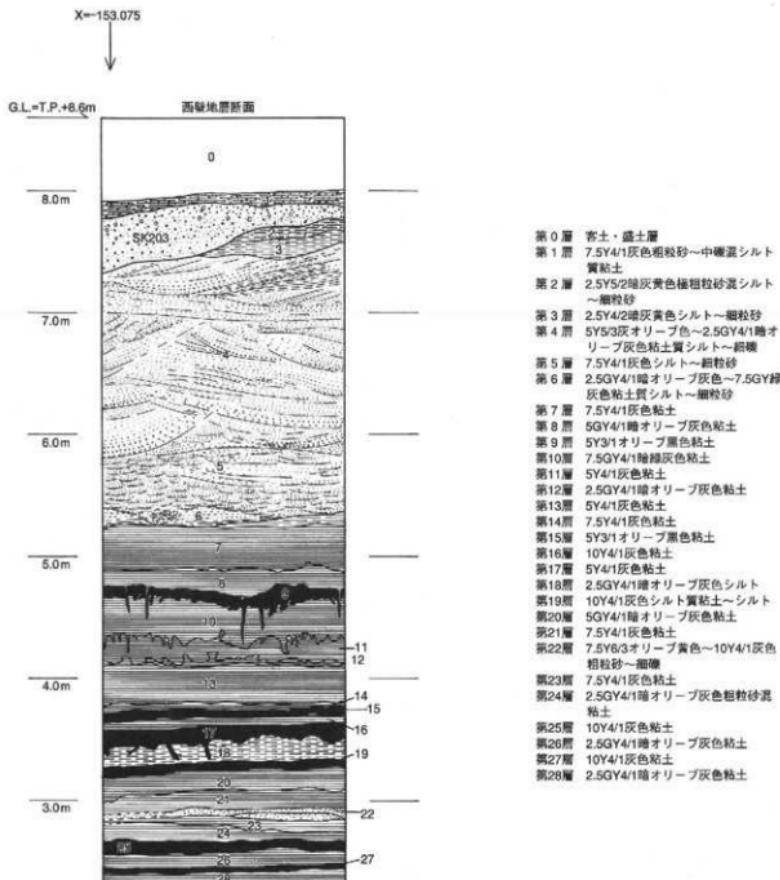
- 第16層 10Y4/1灰色粘土。植物遺体を極少量含む粘土層である。層厚は約0.1m。

- 第17層 5Y4/1灰色粘土。第16層より若干シルト性に富む粘土層である。上面はほぼフラットであるが、下面についてはかなり起伏が激しく、しかも下層の第18層を巻き上げている。この巻き上げられた第18層は5～10mm大の角をもつブロックの状態で混入する。このブロックも第16層同様生物擾乱の影響によるものと思われる。層厚は約0.2m。

- 第18層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト。滞水下で形成された地層である。本層上層においては植物の根痕が顕著に残る。この根痕は、西壁面では概ね南方に、南壁面では東方に傾いている。これは、地震による横ずれが生じた結果と思われる。地震の発生時期について

は、本層を含む上下層で土壤化の認められる地層が皆無であることから決定的要素を欠くが、概ね第15層～第17層の形成過程段階に想定される。層厚は約0.2m。【地震③】

第19層 10Y4/1灰色シルト質粘土～シルト。5mm大の粘土ブロックを含む粘土層である。本層は調査地の南方ではほぼフラットであるが、北方に向かうにつれて若干レベルを上げている。下層の微地形に反映された高低差と思われる。層厚は約0.2m。



第5図 地層断面模式図(S=1/40)

- 第20層 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。静水域で形成された地層である。炭酸カルシウムの顆粒を極少量ふくむ。また、植物の根痕も認められる。
- 第21層 7.5Y4/1灰色粘土。下方において有機腐植物のラミナ構造が顯著な粘土層である。第20層同様滯水下で形成された地層である。層厚は約0.1m。
- 第22層 7.5Y6/3オリーブ黄色～10Y4/1灰色粗粒砂～細礫。本調査地をほぼ東～西方向に流れる河川の埋土層である。この河川が流れている頃の地表面は第23層に相当するが、南方に向かうにつれて分層ラインが不明瞭であることや、第26層上面に土壤化を示唆する様相が認められないことから、湿地帯のような滞水地に流れ込んできた洪水性の砂礫層と思われる（第4面）。層厚は約0.2m。
- 第23層 7.5Y4/1灰色粘土。炭化物をラミナ状に含む粘土層である。静水域で形成された地層である。層厚は約0.1m。
- 第24層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粗粒砂混粘土。第25層の粘土ブロックを含む地層である。本層の下面は人為的に攪拌を受けたためかなり起伏が認められる。この起伏やブロックは、上層で観察されている生物擾乱によるブロックと比較するとかなり角味をもち、しかもその規模も1～5cmと大きい。水田耕作による攪拌層になる可能性が高い。層厚は約0.1m。
- 第25層 10Y4/1灰色粘土。2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土のブロックを多く含む粘土層である。ブロックの大きさは5～10mm大で、その形状は角味をもつ。本層は基本的には閉塞的な湿地帯のような環境下で形成された地層であるが、その後上面は干上がったようである。したがって上方には乾痕（サンクラック）が認められる。層厚は約0.2m。
- 第26層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。滯水下で形成された地層である。層厚は約0.1m。
- 第27層 10Y4/1灰色粘土。滯水下で形成された地層である。生物擾乱の影響によるものか、地層はかなり汚れている。層厚は約0.1m。
- 第28層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。滯水下で形成された地層である。夾雜物をほとんど含まないピュアな地層である。層厚は約0.1m以上。

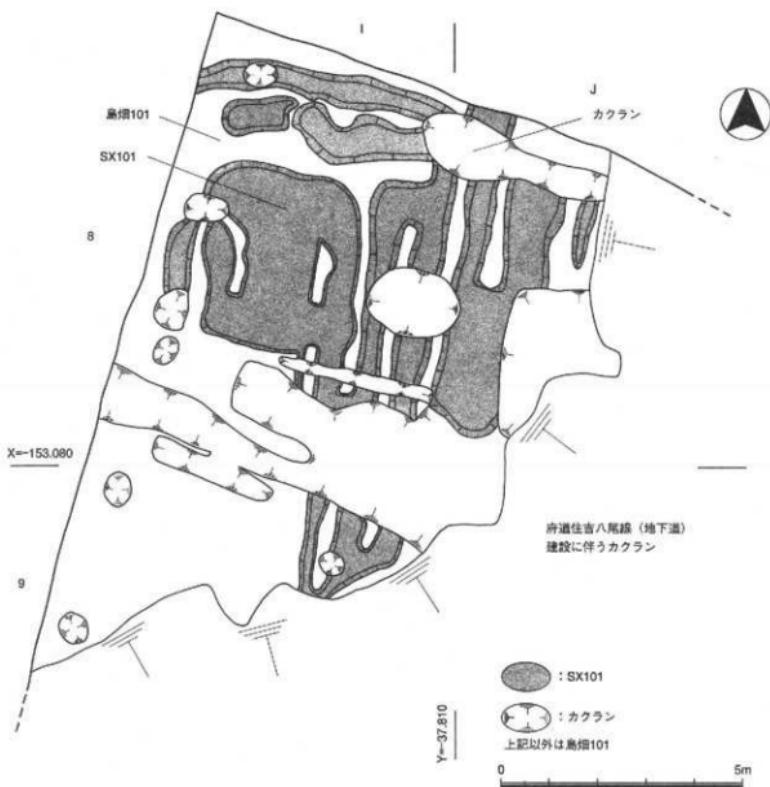
第3節 検出遺構と出土遺物

（1）検出遺構

【第1面】近代～現代

現地表下0.7m(T.P.+7.9m)前後の第1層上面で検出した遺構である。ここでは、性格不明遺構を1基(S X101)と、島畑を1基(島畑101)検出した。以下概説すると、S X101の平面形状は不定形である。断面形状は浅い不定形を呈し、深さは0.05m前後を測る。埋土は地点によって若干異なるが、概ね、砂礫混シルト質粘土～シルトの単一層で充填されている。埋土の堆積構造については、ブロック土が観察されることから、人為的に形成されたものであろう。埋土からは土器片やビニール細片が出土した。限りなく現代に近い遺構である。本調査地は発掘調査が実施される以前は二輪車用の駐輪場であったようで、あるいはそれらに付随する施設の建設に伴う遺構と考えられる。

さて、このS X101の構築層である第1層は、第2面上面に構築された島畑(島畑101)の盛土に

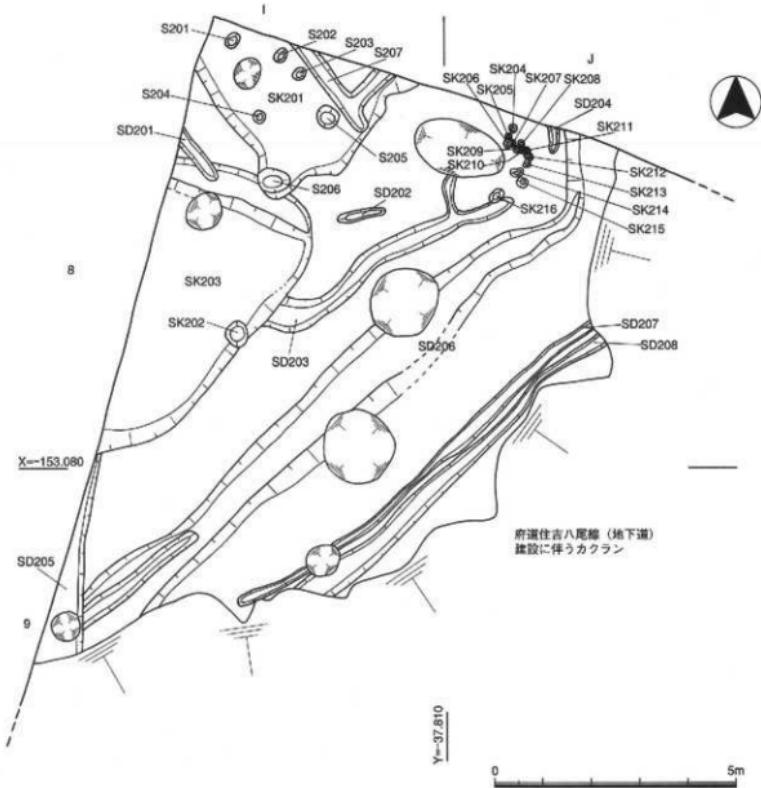


第6図 第1面平面図($S = 1/100$)

相当する。この島煙101の平面規模は、遺構の東側が地下道建設に伴う搅乱により破壊されているため全容は不明であるが、北壁・西壁地層断面ではその盛土層が観察され、さらに北・西側に広がることは間違いない。なお、北壁地層断面の西端と西壁地層断面の北端において、それぞれ島煙101の肩を確認している。島煙101を構成する盛土は、7.5Y4/1灰色粗粒砂～中疊混シルト質粘土のブロックである。高さは0.1m以上を測る。

【第2面】奈良時代～近世

現地表下0.8m(T.P.+7.8m)前後の第2層上面で検出した遺構面である。土坑16基(SK201～SK216)、溝8条(SD201～SD208)を検出した。以下、主な遺構について概説すると、調査区の北西隅で検出したSK201は、北側と西側が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分から判断すると、平面形状は四角形である可能性も考えられる。断面形状は浅い逆台形を呈し、埋土は、2.5Y4/2暗灰黄色シルト質粘土の單一層である。遺構内からは、土器や須恵器の小破片が少量出土した。さらにSK201の埋土を除去した底面で、小土坑6基(S201～S206)および



第7図 第2面平面図(S=1/100)

溝1条(S207)を検出した。これらの遺構はSK201に付随する遺構と考えられ、柱穴や排水溝あるいは間仕切り溝と推定した場合、SK201が竪穴住居になる可能性も否定できない。

SK203はⅦ-2-8-I地区で検出した遺構である。遺構は西側が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分から判断すると、平面形状は長方形の可能性も考えられる。断面形状は不整形な浅い逆台形を呈し、深さは0.25m前後と浅い。埋土は單一層で、2.5Y3/2黒褐色粘土～中礫のブロックで形成されている。埋土には、土師器の皿・壺・高杯、須恵器および陶磁器の小破片が含まれていた。



第8図 第3面平面図(S=1/100)

S K 204～S K 216の13基の土坑は、Ⅶ-2-8-J地区で密集して検出された。これらは、平面形状がほぼ円形に近く、その法量は、径0.2m前後、深さ0.05m前後である。当初、柱穴になる可能性を想定して慎重に調査を行ったが、柱痕などが確認できなかつたことや、配置に企画性が認められなかつたため、土坑とした。遺物の出土はなし。

一方溝については、検出された8条の溝のうち、S D 202・S D 203・S D 206～S D 208は、概ね南西～北東方向に伸びる。これらの溝は、その底面のレベルが、南西から北東に向けて徐々に低くなっていることが特徴である。この溝底面の高低差が、水を流すことを意識したことであるならば、農耕に伴う灌漑用水路あるいは排水路であった可能性が高い。この中で特に規模の大きなものがS D 206である。この遺構は、東側が府道(地下道)建設工事の際に破壊されているため詳細は不明であるが、検出部分の法量は、幅3.5m、長さ14mを測る。断面形状は浅い逆台形で、深さは1.0m以上と推定される。埋土は8層を確認したが、いずれもブロック土で形成されており、遺構の廃絶時の姿を留めていたことが推察できる。埋土からは、土師器一皿・壺・甕・高杯・羽釜・須恵器・蓋杯・高杯・瓦器碗・瓦、陶磁器類などが出土した。

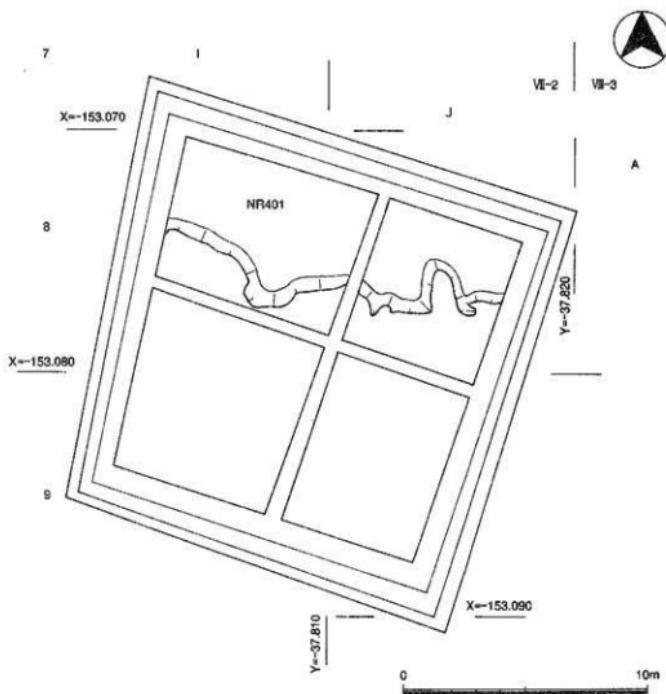
【第3面】古墳時代後期

現地表下0.9m(T.P.+7.7m)前後の第3層上層で検出した遺構で、土坑13基(S K 301～S K 313)、溝2条(S D 301・S D 302)を検出した。土坑については、その配置に企画性は認められず、また遺構の深さも0.1m未満と浅いため、遺構の性格は不明である。ただし、遺構を充填する埋土はブロックであり、人為的に埋め戻されたものである。

一方、溝についても土坑同様、その性格を決定付ける要素に欠ける。S D 301からは土師器および須恵器の小破片が出土したがいずれも埋土に含まれていた遺物であり、遺構の機能時に関連したものではない。S D 302からは遺物の出土はなし。

【第4面】縄文時代後期～晩期

現地表下5.7m(T.P.+2.9m)前後において、東～西方向に伸びる自然流路を1条(N R 401)検出した。本遺構の北・東・西部分は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分で長さ18m以上、幅5m以上を測る。断面形状は、浅い逆台形～レンズ形を呈するものと思われ、その深さは約0.2mである。埋土は、上から①層：5Y5/2灰オリーブ色シルト～極粗粒砂(10Y4/1灰色粘土～粘土質シルトがラミナ状に入る)、②層：7.5Y4/1灰色粘土～シルト質粘土(炭化物をラミナ状に含む)の2層の水成層からなる。堆積構造に注目すると、①層は、南から北に向かってなだらかに傾くラミナ構造が顕著に残る流水堆積層である。粒度組成は、北方に向かうにつれて粗粒化の傾向が認められ、したがって流芯は本調査区の北側に存在する可能性が高い。一方、②層もラミナ構造は認められるが、炭化物のラミナが優勢な点で①層とは異なる。むしろ、静水域で形成された地層といえる。しかし両層には時間的な断絶は認められない。本遺構は第23層上面で検出することを試み、東壁地層断面や西壁地層断面を入念に観察したが、南に向かうに従い分層ラインは不明瞭になる。このことは平面的にも同様のことがいえ、本遺構の南ラインは不確定な要素が多い。この原因として、第23層が土壤化していないことが挙げられる。第23層は炭化物をラミナ状に含む粘土層で、静水域で形成された地層である。おそらく、滞水環境下の本調査地に、東方から洪流水堆積物が供給されたのである。つまり、水のなかに水が突っ込んできたために明確な遺構ラインが確認しにくいのである。



第9図 第4面平面図 ($S = 1/200$)

(2) 出土遺物^{注4}

今回の調査では、遺構に伴う遺物はほとんど出土しなかった。さらに、遺構から出土した遺物についても、それらのほとんどが埋土に混入したものであり、直接的に遺構の性格を決定付けるものでなかつたことが残念であった。一方、地層内からは、比較的の遺存状態が良好な遺物を採取することができた。特に第3面検出遺構の基盤層に相当する第4層～6層といった、時間的整合関係をもつ河川内埋土からは、概ね古墳時代前期～中期にかけての遺物が含まれていることが判明した。また、静水域で形成されたと推測される第7層や第9層からもわずか1点づつではあるが、弥生時代後期初頃、あるいは縄文時代晚期に比定される土器片が包含されており、地層の時期決定に大きな意義を与える成果であった。以下、各遺物について概説していく。

S X101内出土遺物(1)

1は泥面子と呼ばれる土製品である。表面にはモミジをモチーフにしたような文様を施してい

表2 検出連續一貫箇の①

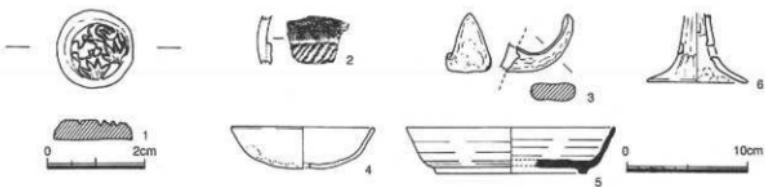
連続箇 番号	連絡名	検出地区	平面形状	法面(m)	断面形状 (往復)		深さ(m)	埋土	地質構造 (柱)
					高さ	底さ			
第1箇 (SK)	島田	鳥居101	W-2-81-91	南北・東西が複数に切ら れ、北・西側が複数区 外に至るため会合部 不明。	不明	0.15以上	7.5m	単層	ブロック土
	不明連繋 (SK)	SK101	W-2-81-J-91	不定形	測定不可	測定不可	7.5m/4/灰色粗粒砂～中粗粒シルト質粘土	場所によって、若干埋土が異なる。2.5m/3/粗 粒砂粗粒砂～中粗粒シルト質粘土上・5m/2/砂 質粘土質砂～中細粒土質シルト～シルト、 7.5m/1/灰色粗粒砂～中粗粒土質シルト	ブロック土
	SK201	W-2-81	北側と西側が複数区 外に至るため会合部 不明。四角形～不定 形。	1辺約3.2	浅い逆台形	約0.10	単層	2.5m/2/暗灰黄色中粗粒～中細粒シルト質粘土	ブロック土
	SK201	W-2-81	ほぼ円形	径約0.3	レンズ形	約0.09	単層	5m/4/1灰色粗粒砂～細粒砂～粘土	ブロック土
	SK202	W-2-81	南北方向に長軸をも つ橢円形	長軸:約25 短軸:約2	レンズ形	約0.08	単層	5m/4/2灰青色中粗粒シルト質粘土	ブロック土
	SK203	W-2-81	ほぼ円形	約0.2	レンズ形	約0.08	単層	5m/4/2灰青色中粗粒シルト質粘土	ブロック土
	SK204	W-2-81	ほぼ円形	約0.25	レンズ形	約0.08	不明	5m/4/2灰青色中粗粒砂～細粒砂シルト(5m/4/2 灰青色粘土質シルトがブロック状に入る)	ブロック土
	SK205	W-2-81	東西方向に長軸をも つ橢円形	長軸:約0.75 短軸:約0.45	レンズ形	約0.12	単層	2.5m/4/2暗灰黄色中粗粒シルト	ブロック土
	SK206	W-2-81	南北方向に長軸をも つ橢円形	長軸:約0.75 短軸:約0.45	レンズ形	約0.07	単層	5m/5/1灰色中粗粒～中細粒シルト	ブロック土
	SK207	W-2-81	南北が複数区外に至 るため伸びる跡状を 呈するか。	長軸:約0.4 長さ:約1.2以上	レンズ形か 透視0.4	約0.07	単層	2.5m/4/2暗灰黄色中粗粒～中細粒シルト	ブロック土
第2箇 (SK)	SK202	W-2-81	南北が複数区外に至 るため会合部不明。 字小に伸びる跡状を 呈するか。	長軸:約0.5以上 短軸:約2.5以上	不整形か浅 い逆台形	約0.25	単層	2.5m/3/2黑色粘土～中細 粒砂～中粗粒シルト	ブロック土
	SK203	W-2-81	東西方向に長軸をも つ橢円形	長軸:約0.5以上 短軸:約2.5以上	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK204	W-2-81	ほぼ円形	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK205	W-2-81	ほぼ円形	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK206	W-2-81	ほぼ円形	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK207	W-2-81	ほぼ円形	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK208	W-2-81	ほぼ円形	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK209	W-2-81	ほぼ円形	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK210	W-2-81	ほぼ円形	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK211	W-2-81	ほぼ円形	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
第3箇 (SK)	SK212	W-2-81	南北方向に長軸をも つ橢円形	長軸:約0.3 短軸:約0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK213	W-2-81	南北方向に長軸をも つ橢円形	長軸:約0.3 短軸:約0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK214	W-2-81	南北方向に長軸をも つ橢円形	長軸:約0.3 短軸:約0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土
	SK215	W-2-81	南北方向に長軸をも つ橢円形	長軸:約0.3 短軸:約0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	透視0.1	ブロック土

表2 掘出選択一覧表その②

選択面	選択名	検出地区	平面形状	底面(m)	断面形状 (柱)	断面形状 (柱)	高さ(m)	土	
								半円形	半圓
第2面 横 (S)	上坑 (SK)	W-2-8J SE216	南東-北東方向に伸 伸びをもつ楕円形	長軸:約0.3 幅:約0.2	レンズ形	約0.05	半圓	5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土質シルト	ブロック土
	SE201	W-2-8I	南北-北西方向に伸 伸びをもつ楕円形	長軸:約0.3 幅:約0.2	レンズ形	約0.06	半圓	5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土質シルト	ブロック土
	SE202	W-2-8I	西南-東北東方向に伸 伸びをもつ楕円形	長軸:約0.2 幅:約0.1	レンズ形	約0.05	半圓	2.5/4/3灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土質シルト	ブロック土
	SE203	W-2-8I-J	南北-北東方向に伸 伸びをもつ楕円形	長軸:約0.4 幅:約0.2	浅い逆台形	約0.05	半圓	5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土質シルト	ブロック土
	SE204	W-2-8J	南北-北東方向に伸 伸びをもつ楕円形	長軸:約0.5 幅:約0.2	浅い逆台形	約0.05	半圓	5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土質シルト	ブロック土
	SE205	W-2-8I-9I	南北-北東方向に伸 伸びをもつ楕円形	長軸:約0.5 幅:約0.2	浅い逆台形	約0.05	半圓	5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土質シルト	ブロック土
	SE206	W-2-8I-J-9I	南北-北東方向に伸 伸びをもつ楕円形	長軸:約0.5 幅:約0.2	浅い逆台形	約0.05	半圓	5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土質シルト	ブロック土
	SE207	W-2-8I-J-9I	南北-北東方向に伸 伸びをもつ楕円形	長軸:約0.5 幅:約0.2	浅い逆台形	約0.05	半圓	5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土質シルト	ブロック土
	SE208	W-2-8I-J-9I-J	南北-北東方向に伸 伸びをもつ楕円形	長軸:約0.5 幅:約0.2	浅い逆台形	約0.05	半圓	5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土質シルト	ブロック土
	SE301	W-2-8I	南北-北東方向に伸 伸びをもつ楕円形	長軸:約0.3 幅:約0.2	レンズ形	約0.1	半圓	7.5/4/1灰白色無鉛粉砂漿粘土質シルト	ブロック土
第3面 土坑 (SK)	SE302	W-2-8I	南北が壁面区外に至 るため全高は不明、 南北部が壁面区外に 至るため全高は不明、 南北に1つ楕円形	長軸:約0.25 幅:約0.15	レンズ形	約0.1	半圓	7.5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土(10YR4/3)-5 黄褐色粘土のブロックを含む)	ブロック土
	SE303	W-2-8I	南北が壁面区外に至 るため全高は不明、 南北に1つ楕円形	長軸:約0.65 幅:約0.3	レンズ形	約0.2	半圓	7.5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土	ブロック土
	SE304	W-2-8I-J	南北が壁面区外に至 るため全高は不明、 南北に1つ楕円形	長軸:約0.65 幅:約0.3	不整な浅 逆台形	約0.08	半圓	2.5/5/2灰暗黄色無鉛粉砂漿粘土	ブロック土
	SE305	W-2-8I-J	南北が壁面区外に至 るため全高は不明、 南北に1つ楕円形	長軸:約0.9 幅:約1.2	浅い逆台形	約0.08	半圓	上から①:5/4/1灰白色無鉛粉砂漿粘土～中等温粘土 シルト ②:5/4/2灰暗黄色無鉛粉砂漿粘土	ブロック土
								上から③:7.5/4/2灰リゾーブ色無鉛粉砂漿粘土～中等温粘土 シルト	ブロック土

表2 掘出堆場一覧表その③

堆場番	堆場名	検出地区	平面形状	法長(m)	断面形状 (柱)	深さ(m)	堆土	
							上から①:5/5(2段)リップ色遮光板砂～繊維混入粘土 ②:7.5V/1灰色中粗砂土質シルト ③:10V/4/3(5V)黄褐色粘土質シルト	下層 シルト
土坑 (SI)	SK306	W-2-81	は正円形	長軸:約0.5 短軸:約0.4	不定形	約0.19	3層 シルト	プロック土
	SK307	W-2-81	は正円形	径:約0.2	浅い逆台形	約0.05	単層 シルト	プロック土
	SK308	W-2-81	は正円形	径:約0.3	不定形	約0.08	単層 シルト	2.5V/2段灰黄色粘土質シルト
	SK309	W-2-81	は正円形	径:約0.2	レンズ形	約0.06	単層 シルト	2.5V/2段灰黄色粘土質シルト
	SK310	W-2-81	南北～北東方向に長軸をもつ楕円形	長軸:約0.9 短軸:約0.6	浅い逆台形	約0.29	単層 シルト	2.5V/4段灰黄色粘土質シルト
	SK311	W-2-81	南北～北東方向に長軸をもつ楕円形	長軸:約0.35 短軸:約0.2	深い逆台形	約0.1	単層 シルト	自然堆積層 プロック土
	SK312	W-2-81	円形に近い不整形	長軸:約0.6 短軸:約0.5	不整形～レ ンズ形	約0.02	単層 シルト	10V/3/7段灰黄色粘土質シルト
	SK313	W-2-81-91	西側が隣接区外に至るため全く不明。 東～南方向に長軸をもつ楕円形 形状。	長軸:2.5以上 短軸:約2.0	不整形なレ ンズ形	約0.16	2層 シルト質粘土②:1.5V/1	上から①:10V/4/3にぶい黄褐色粘土質シルト～中纖維 シルト質粘土
	SK301	W-2-81	南側西～北東側に伸びる	幅:約0.8 長さ:1.9以上	レンズ形	約0.02	単層 シルト質粘土のプロックを含む)	7.5V/4/2段リップ色粘土質シルト(10V/4/3にぶい 黄褐色粘土のプロックを含む)
	SD302	W-2-91	西側西～北東側に伸びる	幅:約0.2 長さ:1.8G以上	レンズ形	約0.03	単層 シルト	自然堆積層 プロック土
第4番 (MR)	MR401	W-2-81-1	道端の水槽・貯蔵池が隣接区外に至るため全く不明。 ほぼ南北方向に伸びる波状であろう。	幅:5m以上 長さ:1.4G以上	浅い逆台形 ～レンズ形	約0.2	2層 シルト	上から①層:5/5(2段)リップ色シルト～繊維混入 粘土質シルトがミクサ状に入 る(10V/4/1灰色粘土～粘土質粘土 海水塗覆層 (軟化物セラミナ状に含む)



第10図 SD 102・SK 201・SK 203内出土遺物(1: S = 1/1・その他: S = 1/4)

る。18世紀後半以降の所産であろう。

S K 201内出土遺物(2~5)

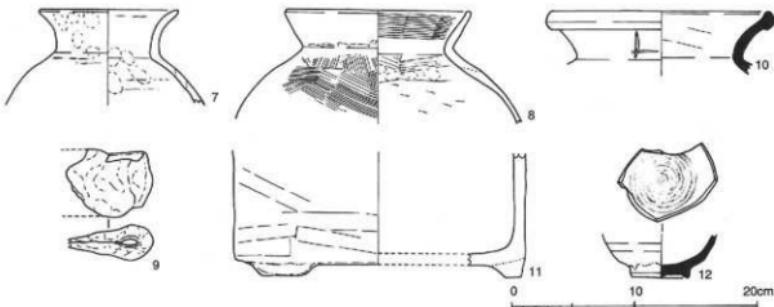
2は弥生土器壺の頸部の一部である。貼り付け突带上にはヘラ状工具で斜めにキザミ目を施す。頸部外面は縦方向にハケ状工具によるナデ(以下ハケナデ)を行う。河内第IV様式に属する。3は土師器の把手。把手は平面形状が鋭角な二等辺三角形、断面形状が扁平な隅丸方形を呈する。4は土師器碗である。底面には、わずかではあるが平坦面が存在する。口縁端部は丸く終わる。調整については摩滅が激しいため不明。形態的には8世紀後半~9世紀初頭に比定されるものだ。5は須恵器杯Bである。高台は高くなく、断面形状は四角形を呈する。調整は内・外面ともに輻轆を使用したナデ(以下回転ナデ)を施す。8世紀前半に属するものと推測される。

S K 203内出土遺物(6)

6は土師器高杯の柱状部~据部である。柱状部から据部にかけて緩やかに広がる。柱状部には透孔が2個残存している。調整は、外面が縦方向の板状工具によるナデ(以下板ナデ)を行い、据部内面には指頭圧による成形痕が顕著に残る。6世紀~7世紀前半に属するものと推測される。

S D 206内出土遺物(7~12)

7は土師器広口の壺の口縁部~体部上半である。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は丸く終わる。摩滅が激しいため調整は不明。内・外面ともに指オサエによる成形痕が多く認められる。帰属時期は不明。ただし庄内式期~古墳時代中期によく似たタイプのものが存在する。8は古式土師器壺。上外方にほぼ直線的に伸びる口縁部と、外傾する平坦面をもち、若干肥厚気味の口縁端部を有する。体部外面は粗いハケナデを行う。内面は板状工具を用いて器壁を薄くする行為(以下ケズリ)が行われるが、頸部付近のみ粗いハケナデを施す。頸部の屈曲はシャープでない。布留式期新段階に属するものだ。9は土師器の把手部分と推測される。幅約5.5cm、厚さ約1.0cmを測る粘土の帯を折り曲げることにより把手を形成する。屈曲部分は丸みをもち、空洞化しているため、それほどきつくは折り曲げていない。外面には指頭圧痕が顕著に残る。10は須恵器壺の口縁部~頸部である。口縁部は若干外反しながら上外方に立ち上がる。口縁端部は外傾する平坦面を形成しながら肥厚する。調整は主に横方向にナデを行う。口縁部外面には、ヘラ状工具によって「十」字状の記号文が施される。6世紀中頃(T K 10型式)の所産であろう。11は近世(江戸時代以降)の火鉢である。12は唐津碗の底部である。見込み部分には渦巻き状に輻轆目が顕著に残る。高台は削り出しにより形成されている。高台部以下は露胎。17世紀中頃に比定される。



第11図 SD 206内出土遺物(S = 1/4)

第1層内出土遺物(13・14)

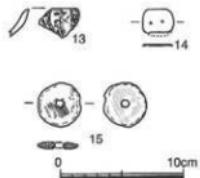
13は口縁部細片である。器種は不明。口縁端部付近で小さく外反し、外面にはキザミ目が施される。外面には三彩陶器のような釉薬が施される。14は石製の双孔円盤である。摩滅が激しい。

第2層内出土遺物(15)

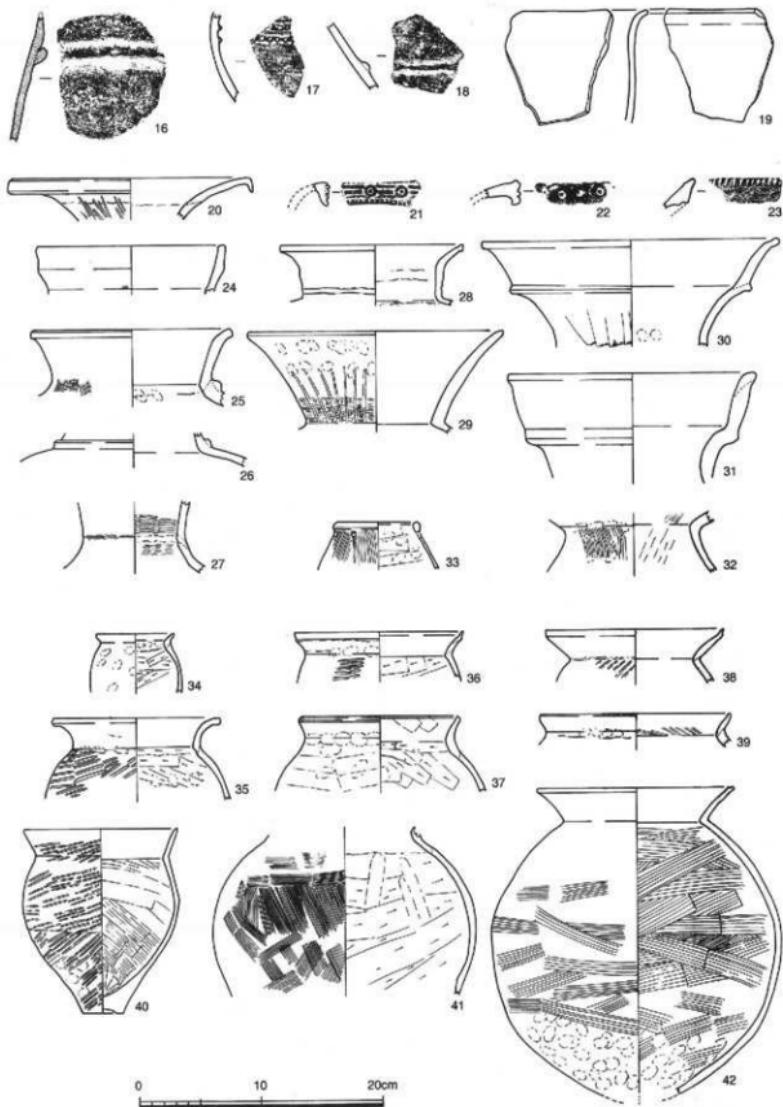
15是有孔円盤である。材質は緑泥片岩と推測されるが、科学的な根拠にかける。

第4～6層内出土遺物(16～125)

16は縄文土器深鉢の体部付近と推測される。摩滅が激しく不確定要素を多分に含むが、外面には1条の貼付突帯が廻り、突帶上にはヘラ状工具によるキザミが施される。縄文時代晩期に属する。17・18は弥生土器の壺である。17は頸部の一部である。2条の突帯を貼り付け、その上面にキザミを施す。一方18は肩部の一部で、貼り付け突帯が1条廻り、その上下には突帯を貼り付ける際に生じた横方向のナデ調整痕も観察される。いずれも河内第I様式に比定される。19は弥生土器壺である。口縁端部は外反し、丸く終わる。調整については摩滅が激しいため不明瞭ではあるが、内・外面ともに横方向にナデを行っていると推測される。こちらも河内第I様式の所産であろう。20～33は壺である。この内、20～23・25～27・33は弥生土器(河内第IV～V様式)、24・28～32は古式土師器(庄内式～布留式)に区分される。20～23は広口の壺である。この内20は、口縁部が大きく開きながら外反し、端部は垂下口縁を形成する。垂下口縁の断面形状は三角形。調整は、外面が縦方向に板状工具を用いたミガキ(以下ミガキ)を施し、内面はナデを行う。21は口縁端面に3条の沈線を施し、その後竹管押圧円形浮文を貼り付ける。また上端と下端にはそれぞれキザミ目を入れる。22は、口縁端面が横ナデにより凹面気味である。ここには少なくとも3個の竹管文が押圧される。23は口縁部が受口状をなし、端部にヘラ状工具を用いてキザミ目を入れて加飾を行う。24は、複合口縁気味にわずかに屈曲しながら立ち上がる口縁部を有する。調整は摩滅が激しく不明瞭である。布留式期 第12図 第1層・第2層内出土新段階に属するものと推定される。25・26は広口の短頸壺である。



第1層・第2層内出土
遺物(S = 1/4)



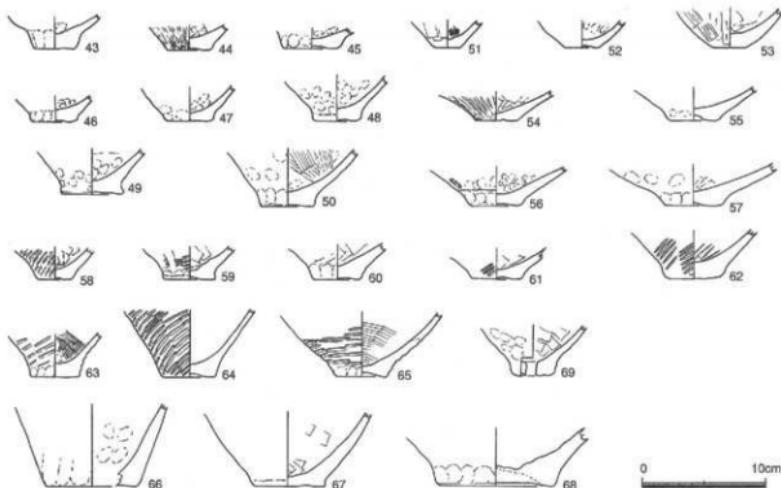
第13図 第4層～6層内出土遺物①(S=1/4)

この内25は、上外方に直線的に伸びた後、端部付近でわずかに外反する口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。頸部には、断面三角形の貼り付け突帯が廻る。調整は摩滅が激しく不明瞭であるが、おそらく口縁部は内・外面ともに横ナデを、体部外面は縦方向にハケナデを行う。26とともに、河内第Ⅳ～第Ⅴ様式の前半までに属するものと推定される。27は長頸壺の頸部付近である。外面調整は摩滅が激しく不明瞭。内面は横方向にハケナデを施すようだ。河内第Ⅴ様式に属するか。28は、ほぼ直立する口頸部と、そこから外反気味に大きく開く口縁部からなる広口壺である。口縁端部は平坦面を形成する。調整は不明瞭であるが、基本的には内・外面ともに横ナデが行われていると推測される。庄内式期に属するか。29は大型の直口壺である。口縁部は直線的に上外方に広がり、端部は丸く終わる。外面には縦方向のミガキが施される。内面はナデ調整。庄内式期～布留式期の所産。30・31は二重口縁壺である。この内30は、擬口縁が外反し、稜を形成後、さらに外反する口縁部をなす。端部は丸くおさめる。調整は、頸部外面付近が縦方向にハケナデを施す以外は、横ナデが主体となる。一方31は、大型の壺または甕の口縁部で、調整は外面が横ナデ、内面が横方向にハケナデを行う。胎土や色調を見る限り、山陰地方からの搬入品の可能性が高い。布留式期古段階に比定される。32は讃岐地方で類例が多く認められる大型複合口縁壺の頸部付近の可能性が高い。肩部が丸みをもって膨らまず、内反気味な点が讃岐地方の土器の特徴と合致する。調整については摩滅が激しく不明瞭であるが、体部は外面が縦方向のハケナデ、内面が縦方向や横方向のケズリを行う。胎土には角閃石が多く含まれる。33は、口縁端部を若干外側に折り返し、肥厚させた無頸壺である。外面は縦方向にハケナデを、内面は横方向に板ナデ調整を行う。口縁端部付近に2個の紐孔が認められる。河内第Ⅳ～V様式に属するものと推測される。胎土には角閃石が多く含まれるため、生駒西麓産であろう。

34～42は弥生土器あるいは古式土師器の甕である。34は小型品である。口縁部は上外方に短く直線的に開き、端部は丸く終わる。体部外面には指オサエによる成形痕とナデによる調整痕が認められる。内面はケズリが施されるが、頸部付近までは及ばない。35は口縁部が外反し、端部は丸く終わるもので、肩部外面にはタタキを、内面はケズリ調整を行う。内面のケズリは頸部付近まで施されるが、庄内式甕に認められるような鋭角は形成しない。庄内式期に属するものである。36は口縁部が外反し、端部をつまみ上げ、受け口状を呈するものだ。調整は口縁部が横ナデを行う。体部外面はタタキが、内面はケズリが施される。内面のケズリは頸部付近まで行われる。37は、口縁部が外反気味に開き、端部も若干つまみ上げている。体部外面は板ナデ、内面はケズリを施す。ケズリは頸部付近まで及ぶが、庄内式甕のように明確に屈曲しない。38は、口縁部が外反気味に上外方に伸び、端部はつまみ上げるタイプで、体部外面にタタキ調整を施す。内面は摩滅が激しく不明瞭。頸部の屈曲は庄内式甕のようにシャープではない。口縁部は、内・外面ともに横ナデ。39は、口縁部が上外方に直線的に短く伸び、端部が丸く終わるものである。調整は口縁部外面が横ナデ、内面は粗いハケナデを施す。体部内面は摩滅が激しいため不明瞭であるが、頸部付近までケズリが行われているものと思われる。40は、タタキ出し技法により形成された口縁部が上外方に直線的に伸び、端部が丸く終わるものである。底部は上げ底。調整については、外面がタタキ、内面は体部下半がハケナデ、上半が板ナデである。頸部の屈曲は鈍角ではあるが、明瞭である。なお、体部については、外面に施されたタタキの角度の違いや接合痕などから、二分割して成形していることが推測される。河内第V様式～庄内式期に属する。41は頸部～体部で

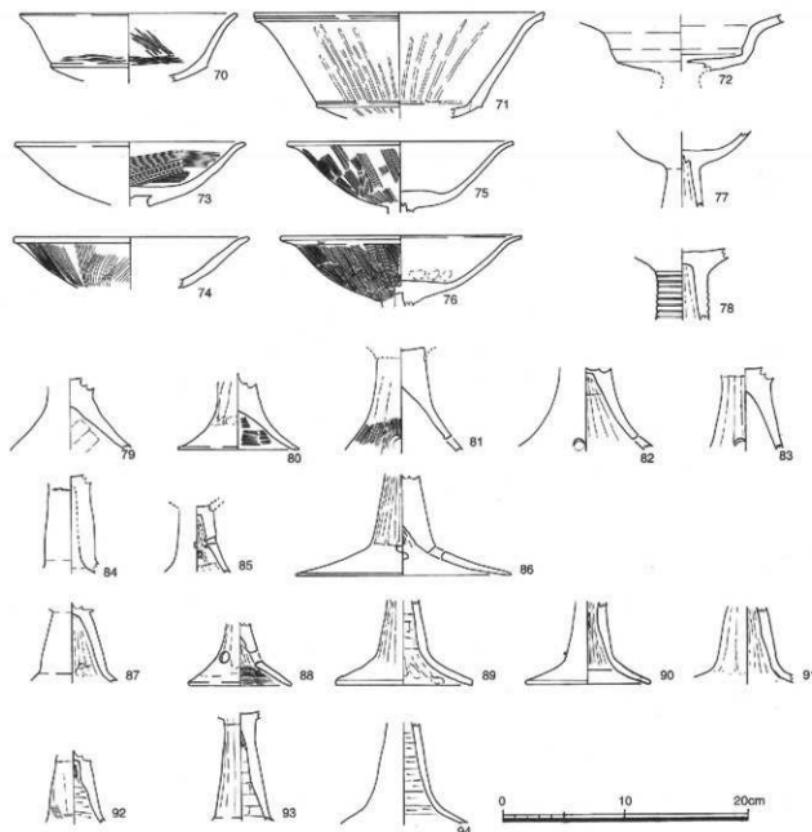
ある。外面調整は縦方向のハケナデ後、肩部付近については横方向のハケナデを行う。一方内面は、ケズリ後上半は指ナデを行う。ケズリは頸部付近まで及ばない。いわゆる布留式甕である。布留式期古段階のものであろう。42は、口縁部が外反気味に広がり、端部上面に平坦面を形成する。体部最大径は中位付近に存在し、ほぼ球形を呈する。外面下半には指頭圧痕が顕著に認められ、中位付近では横方向のハケナデが施される。内面についても、底部付近には指頭圧痕が認められ、それ以外の箇所ではハケナデが行われる。頸部の屈曲はシャープであるが、若干丸みをもつ。布留式期新段階に属するものである。

43~68は、弥生土器あるいは古式土師器の壺または甕、鉢の底部と推測される。43は非常に突出した底部で、底部外面は平底を呈する。底部外面や内面に指頭圧による成形痕が認められる。44・45は底部の突出が非常に小さいもので、底部外面が上げ底気味のものである。この内44は、体部外面に縦方向のミガキ、内面は板ナデを行う。底部外面には指頭圧痕あり。46~50は、底部が突出するものである。指オサエによる成形痕は認められるが、調整は不明瞭なものが多い。わずかに50の内面にハケナデが残る。51~53は内湾気味に開く体部を有するもので、その形態的特徴から壺と推測される。この内51は、底部が平底を呈し、底部外面には工具痕または回転台の痕跡のようなものが残る。調整は外面が板ナデ、内面がハケナデである。また53は、底部外面に若干の平坦面を形成し、体部外面にケズリを、内面に板ナデをそれぞれ施す。54~57は、体部が大きく開く形態を有するもので、器種は壺になると考えられる。この内54の底部外面が平底を呈する以外は、上げ底をなす。調整については不明瞭なものが多いが、54は外面が縦方向のミガキを、内面は板ナデをそれぞれ施す。また57は、外面が指オサエによる成形後ナデ調整を行なうようだ。



第14図 第4層～6層内出土遺物②(S=1/4)

内面には工具痕が認められるため、板ナデが施されていると思われる。58～65は外面にタタキ調整を行うものである。この内、58～62については、内面調整が板ナデであり、ハケナデを施す63～65と手法が異なる。なお、外面調整にタタキを行う器種は、甕に多く認められることから、これらは甕の可能性が高い。66～68は、底部径から判断して大型器種に分類できる。この内66は平底の底部を有し、体部は直線的に上外方に開く。摩滅が激しいため調整は不明瞭。内・外面ともに指ナデが認められる。河内第IV～V様式に比定される。67は平底の底部を有する。調整は不明瞭。底部内面には板状工具の痕跡が認められる。外面に黒斑あり。68は大型の壺の底部である。調整は内・外面ともにナデで、外面には黒斑が認められる。弥生時代中期の所産であろう。69は



第15図 第4層～6層内出土遺物③(S=1/4)

底部が突出し、そのほぼ中央に焼成前に外側から穿孔したいわゆる有孔鉢である。外面には指オサエによる成形痕や指ナデ調整痕が認められる。一方内面については、板ナデが施される。河内第V様式以降のものと思われる。

70~94は弥生土器~古式土器の高杯である。この内70~77は杯部分である。70・71は杯部が屈曲するタイプである。両者ともに屈曲部分の後は明瞭である。調整については、70が口縁部内・外面に横方向のミガキを施した後、内面のみ部分的に斜め方向にミガキを行う。71は内・外面とともに放射状にミガキを施す。前者は河内第V様式新段階~庄内式期古段階に、後者は布留式期新段階に比定されるものである。72は、杯部が二段に屈曲するいわゆる有段高杯と呼称されるものである。摩滅が激しいため調整は不明。庄内式期中段階~新段階に属するものである。73~76は杯部が浅い皿状のものである。不確定要素を多分に含むが、概ね内・外面ともにハケナデを施していると推測される。この4点はいずれも杯部と柱状部が挿入付加法により接合される。所属時期は布留式期新段階に求められる。77は杯部が椀状のもので、柱状部内面には絞り痕が認められる。こちらも布留式期新段階に比定される。

一方78~94は柱状部~裾部にかけてある。78は、円柱状の柱状部外面に凹線文を施すものである。内面には成形時に生じた絞り目が認められる。河内第IV様式新段階には、凹線文を多用する土器が多く存在するが、同時期の吉備地方や山陰地方にも本例と形態的に類似する高杯が存在することから、これらの地域からの搬入品の可能性が考えられる。79・80は、中実で短い柱状部を有し、円錐状にゆるやかに大きく広がる裾部をもつものである。両者ともに摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、79は内面を板ナデし、一方80は柱状部外面を縦方向に板ナデし、面取り風に仕上げているほか、裾部内面には横方向にハケナデを行う。いずれも河内第V様式古段階の所産であろう。81は中実で短い柱状部を有し、ゆるやかに聞く裾部をもつタイプで、透孔が2個残存している。調整については、外面が縦方向にハケナデを施すが、柱状部付近ではその後縦方向に板ナデが行われる。裾部内面はナデ。82は柱状部と裾部の境界が不明瞭で、柱状部が中空のものである。調整は内・外面ともにナデで、内面には絞り痕が認められる。透孔が一個あり。河内第V様式に属するものと推測される。83は円錐状の柱状部を有するものである。柱状部は中空。透孔が1個認められる。調整は外面が縦方向に板ナデを、内面はナデを行う。河内第V様式に属する。84は柱状部が中空で、円柱状を呈するものだ。85は柱状部から裾部にかけてゆるやかに広がるタイプである。柱状部は中空。柱状部には4方向から透孔が穿孔されるが、割り付けは乱れている。調整は、外面については摩滅が激しく不明瞭。内面は横ナデが行われている。布留式期新段階に比定される。86は、柱状部が中実で、明確に屈曲しながら大きく聞く裾部を有するものである。柱状部外面には、縦方向に板ナデ後ミガキ調整を行なう。内面には絞り痕が認められる。裾部には4方向から透孔を穿っている。87は、内湾気味に聞く柱状部と、屈曲しながら広がる裾部を有するもので、柱状部は中空。調整は摩滅が激しく不明瞭。なお、柱状部内面から杯部内面にかけて貫通する、非常に細い針状の工具による刺突孔が一箇所存在する。柱状部と裾部を接合する段階で必要とした孔と推測される。布留式期中段階に比定される。88~91は柱状部~裾部にかけてゆるやかに聞くタイプのものである。この内88は、柱状部外面に縦方向の板ナデ調整を行う。面取りを意識しているようだ。内面には成形時の絞り痕が残る。また裾部内面には横方向のハケナデが施される。透孔は3方向から穿孔される。5世紀代のものか。89~91については、概ね柱

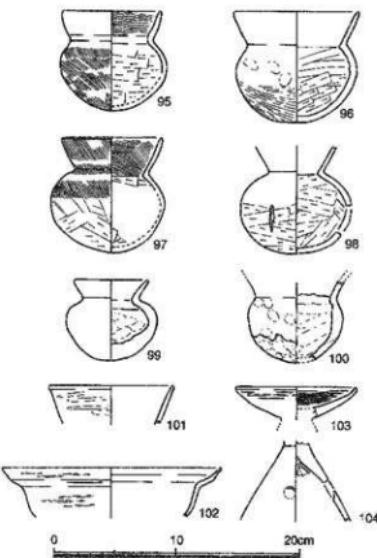
状部外面に面取り調の板ナデを施しているようだ。92～94は直線的に開く中空で長い柱状部と、ゆるやかに開く擴部を有するものである。調整は、柱状部外面に縦方向の板ナデを、内面に横方向のケズリを施している。布留式期新段階に属するものである。

95～101は古式土師器の小型丸底壺である。これらの土器は、成形方法や調整方法により概ね以下の3タイプに分類できる。95・96は体部外面に粗いハケナデを施すものである。97・98は体部下半外面にケズリが行われ、前者に比べやや粗雑な作りである。以上4点は体部内面にケズリ調整を施す点で一致する。一方、99・100は摩滅が激しく調整については不明な点が多いが、器壁が厚く、内面調整も指ナデに留まる点で、最も粗雑な作りといえる。これらの土器はいずれも布留式期新段階に属するものと思われる。

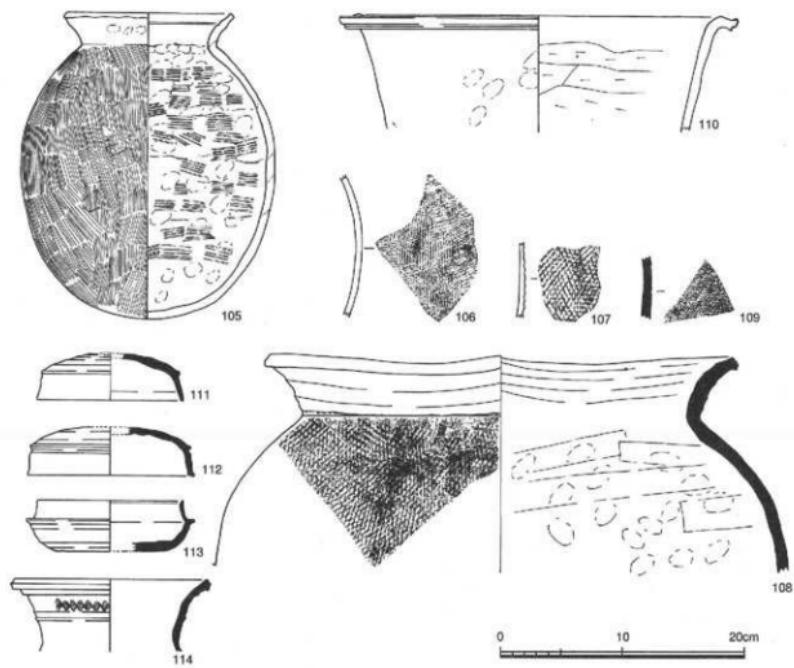
102は有段鉢である。摩滅が激しいため調整は不明瞭。器壁は薄い。外面はおそらく横方向の細かいミガキ調整が行われた精製品であったものと推測される。庄内式期新段階～布留式期古段階に属するものだ。

103・104は小型器台である。この内103は皿状の受け部を有する。受け部と裾部は貫通しないタイプである。口縁部は内湾気味で、端部は若干つまみ上げる。調整は摩滅のため不明瞭であるが、内・外両面ともに横方向に密なミガキが施されているものと推測される。また104は内湾気味に広がる擴部を有する。透孔は2個認められる。受け部と裾部は貫通しない。外面調整は不明。内面は板ナデを行う。両者はともに庄内式期新段階～布留式期古段階に属する。

105～109はいわゆる韓式系土器⁸⁸またはその可能性の高いもので、この内105～107は軟質、108・109は硬質に分類される。105は長胴の土師器壺である。口縁部は外反し、端面には外方に傾斜する平坦面を形成する。底部は丸底。調整は体部外面が指オサエによる成形後、縦方向のハケナデを施す。内面も指頭圧による成形後、横方向にハケナデを行う。頸部の屈曲はシャープでない。器壁は厚い。106・107は壺体部の一部であろう。前者は外面に繩席文タタキが、後者は斜格子文タタキがそれぞれ施される。108は大型の壺の口縁部～体部上半である。口縁部は外反し、端部には外方に傾斜した平坦面を形成する。体部外面には斜格子文タタキが施される。体部内面は指オサエによる成形後、横方向に板ナデ調整を行う。口縁部は内・外両面ともに横ナデ。109は壺体部の一部であろう。外面には繩席文タタキが行われた後、沈線が3条施される。110は瓶の口縁部である。内面には横方向にケズリが行われる。胎土が生駒西麓産のものと明らかに異なるため搬入品の可能性が高い。これらの土器は概ね5世紀中頃～後半の所産と推測される。

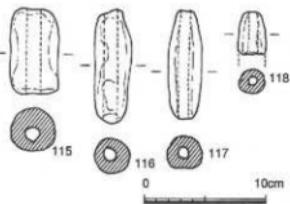


第16図 第4層～6層内出土遺物④(S=1/4)

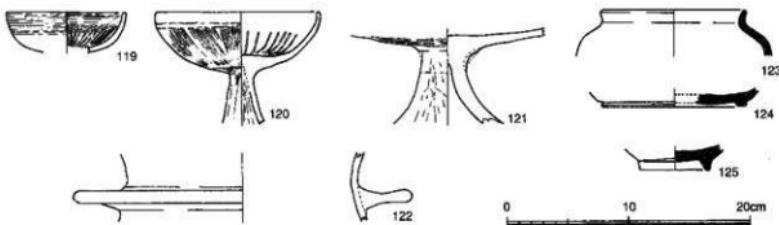


第17図 第4層～6層内出土遺物⑤(S=1/4)

111～114は概ね5世紀後半に所属する須恵器である。111・112は杯蓋で、いずれも口縁端部に段を形成する。この内111は口縁部が『ハ』字状に開き、稜は丸く終わる。天井部はやや丸い。天井部外面の2/3は回転ヘラケズリ調整を行なう。内面は、天井部が指ナデの他は、回転ナデを施す。一方112は天井部がやや丸く、稜は鋭い。天井部外面は、上方2/3以上を回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを行なう。113は、立ち上がり部が内上方に外反気味にのびる杯身で、口縁端部は段を成す。杯底部には平坦面を形成する。調整は、杯部外面が上半を回転ナデ、下半を回転ヘラケズリで仕上げる。内面は回転ナデ。114は壺。口縁部は外上方に伸び、その後口縁端部付近で若干外反する。口縁端部は外傾する凹面をなす。外面には回転ナデにより形成された3条の凸



第18図 第4層～6層内出土遺物⑥
(S=1/4)



第19図 第4層～6層内出土遺物⑦(S=1/4)

線が認められる。その凸線のうち、上2条の間には波状文が施される。内面は回転ナデ。

115～118は管状土錘である。これらの土錘は、形態的特徴から以下の2タイプに分類できる。115は側面形状が長方形を、一方116～118は側面形状が細長い梢円形を呈するものである。これら4点は、いずれも心棒に粘土を巻き付けて、指ナデにより成形を行う。なお、116の外面には黒斑が、117には外面の一部に半坦面が認められ、製作技法あるいは焼成方法の一端を暗示する痕跡として重要であると思われる。

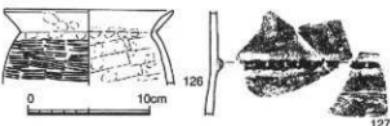
119は土師器杯Cに分類される。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は若干ではあるが、内傾する半坦面を形成する。外面調整は、口縁端部付近は横ナデ後、横方向に細かいミガキを施す。下半については、指オサエ、ナデ調整を行う。内面には、ナデ調整後、放射状に暗文が施される。飛鳥Ⅰ～Ⅲに属するものであろう。120は土師器高杯。杯部は椀形を呈する。調整は、杯部外面が縦方向にハケナデを行った後、口縁端部付近のみ横ナデを施す。内面は口縁端部が横ナデ、杯部はナデである。杯部には放射状に暗文が施される。柱状部外面は縦方向にハケナデ後、縦方向に板ナデを施す。内面には絞り痕が認められる。6世紀代(前半?)に属するものである。121も土師器高杯である。杯底部外面にはミガキが施される。内面はナデを行う。柱状部外面は板状工具による面取りが行われる。内面には絞り痕が明瞭に残る。杯部と柱状部との接合痕が明瞭に残る。飛鳥～奈良時代のものであろう。122は長胴の体部を有する土師器羽釜と推測される。内・外両ともにナデ調整が行われる。7世紀代の所産か。123は須恵器壺Aである。口縁部は短く、上外方に直線的に立ち上がる。端部は丸く終わる。内・外両ともに回転ナデ調整を行う。8世紀後半～9世紀初頭に比定される。124は須恵器高台部分である。高台はそれほど高くなく、断面形状は四角形。8世紀後半～9世紀初頭に属するものか。125は青磁碗の高台部分である。ケズリ出し高台である。高台は高く、逆台形を呈する。釉は内面のみ。近世の国産器である。なお119～125は明らかに所属時期が異なるため、混入遺物と思われる。

第7層内出土遺物(126)

壺の口縁部～体部上半である。口縁部は外反気味に開き、端部は丸く終わる。外面調整は口縁部が内・外両ともに横ナデ。体部は外面がタタキを、内面は板ナデを施す。板ナデは頭部付近までは及ばないため、頭部の屈曲は庄内式壺のようにシャープではない。また庄内式壺のように器壁は薄くない。胎土には角閃石が含まれることから、生駒西麓産の上器である。

第9層内出土遺物(127)

深鉢の一部である。外面には突帯が1条廻り、その上面にはヘラ状の工具によるキザミが施される。キザミはD字状を呈する。縄文時代晩期の長原式に属するものである。



第20図 第7層・第9層内出土遺物(S=1/4)

第3章 調査の結果

今回の調査地の南側に位置する旧国鉄竜華操車場跡地内では、再開発事業に伴う調査が(財)大阪府文化財調査研究センター、および当調査研究会により断続的に実施されている。その結果、概ね弥生時代～近世の遺構が連続と遺存していることが明らかになりつつある。特に、本調査地の南側に隣接する地点で行われた、(財)大阪府文化財調査研究センターの調査(後藤他1998・赤木他2001)では、弥生時代中期～近世までの遺構・遺物が検出されており、各時代の遺構面などが本調査地に広がっている可能性は充分想定できた。以下、これらの既往の調査成果を踏まえながら、時代順に概観していく。

弥生時代前期以前

第10層～第28層がこの時期に相当するものと思われる。いずれも、基本的には静水域に形成された湿地性の地層である。遺物の出土はまったく認められない。遺構については、第4面で検出したN R 401が挙げられるが、先述した通り、一時期の地表面上に存在したものかどうかは不明である。ここで、ポイントとなるのは、第9層を含む、6層に及ぶ暗色を呈した粘土～粘土質シルト優勢の地層(以下、暗色帶と呼称)である。この暗色帶は近畿自動車道建設に伴う(財)大阪文化財センターの調査や、竜華操車場内で実施された(財)大阪府文化財調査研究センターの調査をはじめ、久宝寺遺跡はもちろんのこと、広く河内平野に存在することは、周知の事実である。また、(財)大阪市文化財協会が行ってきた長原遺跡の調査では、この暗色帶に年代を与えることを試みている(趙1995)。これらの成果をもとに本調査で確認された地層に年代を与えると、概ね以下のようになるのではないか。つまり、第25層・第27層が縄文時代後期に、第19層が縄文時代晩期に、第15層・第17層が弥生時代前期にそれぞれ形成された地層の可能性が高い。

一方、この付近の地層の堆積構造を詳細に観察すると、人為的に形成されたと推測される角味をもったブロックを含む地層が存在することが明らかになった。第15層暗色帶とその上層に存在する第14層、第17層暗色帶、第19層暗色帶、第25層暗色帶とその上層に存在する第23層、第24層などがその地層に相当する。この内、第25層暗色帶とその上層の地層については、地層の形成年代が縄文時代後期に比定され、しかも堆積構造の特徴から水田耕作土の可能性があるとし、この

仮説が肯定されるのであれば、国内最古段階の水田の発見という、大きな意義をもつ地層であると考え、これらの地層の科学的な分析を実施することにした。その結果、残念ながら積極的に水田と肯定できる成果を得ることができなかったが、第19層、第17層、第15層、第14層については、乾燥した草地であった可能性が高く、この内、第15層、第14層上面において遺構が存在する可能性が高いという分析結果を得たことを付加しておく。

弥生時代中期

第9層暗色帯がこの時期に相当する。本調査では、地層観察の結果、静水域に形成された堆層であると認識、この地層に包含される遺物が地層の年代を決定付けると判断し、その結果、地層内出土の縄文上器の年代から、本地層の形成時期を縄文時代晚期であると考えていた。しかし、先述した通り、暗色帯を堆層にして地層の年代を決定していく方法では、縄文時代晚期とするには無理があるということ、本調査地の南側で実施された(財)大阪府文化財調査研究センターの調査では、同レベルにおいて暗色帯が存在し、その地層が弥生時代中期に比定される水田耕作土であることが判明したことなどから、本地層もその辺りの年代を与える。

弥生時代後期

地層内出土遺物の存在から、第7層がこの時期に相当する可能性が高い。

古墳時代初頭～中期

第4層～第6層がこの時期に形成された地層である。この地層には、古くは縄文時代晚期から新しくは奈良時代に比定される遺物が含まれていた。遺物の割合を見ると、古墳時代初頭～中期にかけてのものが圧倒的に多く、それ以外では、縄文時代晚期・弥生時代中期・飛鳥～奈良時代のものが少量存在する。本層は河川の流水作用により形成された地層であるため、本調査地の上流に存在する多くの遺跡を削りながら、多くの砂礫を運搬してきたと考えることは容易であり、該当時期よりも時期的に古い遺物が含まれていても、それは充分理解できる。一方、飛鳥～奈良時代のものについては、後述する、第2面検出遺構がこれらの遺物と時期的に符合することから、混入遺物の可能性が高い。以上のことから、第4層～第6層の形成時期を古墳時代初頭～中期に比定した。

さて、この第4層～第6層はラミナ構造が顕著に残り、砂礫層を主体とした粒度組成を有することなどから推測すると、比較的流れの中心付近に堆積した河川内埋土と考えられる。この河川は、堆積構造から判断すると、その流向はおおよそ南東から北西方向であったようだ。しかし、一時期、南西方向から供給されたと考えられる粘土ブロックを含む砂層が存在することから、時期によって、微妙に流向を変化させていたことが推測される。さて、この砂層内に含まれていた粘土ブロックであるが、自然の流水堆積時には形成されないものである。この粘土ブロックの供給先と推測される本調査地の南西部には、(財)大阪府文化財調査研究センターが実施した調査地が存在し、そこでも本調査地検出の河川と同一の河川を検出、しかもここでは、河川内に堰を構築していたことが判明した。これらはそれに関連する粘土ブロックの可能性が極めて高い。その後、この河川は埋没し、自然堤防状の高まりとなり、河川としての機能を終えた段階で、七ツ門古墳(赤木・西村・酒井・秋山・瀬川2001)が構築されるのである。

古墳時代後期

第4層～第6層の河川が埋没し、自然堤防状の高まりを形成した段階で、その高まりを利用し

たのが第3面の遺構群である。時期的には、概ね古墳時代後期に比定され、大小多数の土坑などを検出した。調査区北部に密集する小土坑群については、検出当初時点で建物を構成する柱穴の可能性を想定したが、掘形断面の観察では柱痕を確認できるものはなかった。当地の南側に近接するセンターの96-1トレンチでは、ほぼ当地と同レベルで同時期の掘立柱建物(2間×3.8m×2間<3.4m>)が見つかっており、当地との有機的関係に興味がもたれる。

奈良時代～近世

第2面では、奈良時代～近世とかなり長い時期の遺構を同一面で捉えるに至った。これは、当地が長期間にわたり安定した地形環境であったことを示唆する。そのことは、遺構の構築層となる第2層の上方が著しく土壤化し、堅く縮まっているといった地層観察からも窺うことができる。堅穴住居の可能性があるSK201については、埋土内から出土した須恵器杯身の所属年代から推測すれば、奈良時代に比定されることが考えられる。当地から東へ約50mの地点において実施された八尾市教育委員会の遺構確認調査でも、現地表下1.4mのところで7世紀の居住城を示唆する小溝・小穴が検出されており、当地との有機的関係が考えられる。また、近世に比定される4条の溝(SD202・SD203・SD206・SD207)については全て南西～北東方向に伸びる溝で、これらは既述したように農耕に伴う灌漑用水路と思われる。これらの溝の時期は、出土した陶磁器の破片から江戸時代に比定されるものであるが、切り合い関係から判断すると幅広のSD206が最も古い時期に掘削されたものと推定される。

近世～近代

第1面で検出した近世～近代にかけての鳥畠は、竜華操車場内においてもほぼ同レベルで検出されており、かなり広範囲に広がり存在するものと思われる。当地周辺では、当該期は生産域としての機能を有していたことが言える。

その他

最後に、今回の調査では、地震の影響により形成されたと推測される地層の変形構造を確認したのでそれを紹介したい。まず、地震の痕跡と推測される地層は、第8層、第9層、第11層、第12層、第18層である。いずれの地層も、その上面、下面ともに、まるで炎が立っているような、乱れた層相を呈する。この内、第11層、第12層については、人為的な踏み込みによる地層の亂れの可能性も考えられるため、以下では、第8層を地震①、第9層を地震②、第18層を地震③とし、まとめを進める。この地震痕跡は、いずれも弥生時代に発生した地震により形成されたものである。この内、地震①と地震②については、本例と同じように連続して発生したと考えられる2回の地震痕が東大阪市内における調査で確認されており¹⁰、その発生時期が概ね弥生時代後期と古墳時代初頭(庄内式期)に比定されていることから、前者が地震②、後者が地震①の可能性が考えられる。ただし、暗色帯を鍵層にして地層年代を決定付ける方法と比較すると、時期的なずれが生じる。この点については、今後、周辺で行われるであろう調査例の増加をまって、結論を出したい。一方地震③については、その発生時期が暗色帯を鍵層とした年代決定法から割り出すと、縄文時代晩期～弥生時代前期に比定されるが、決定打に乏しい。こちらについても、今後の類例の増加を待って、改めて結論を出したい。

(註記)

- ・註1：本調査で確認された地盤の存在やそれにより形成された変形構造を有する地層の解釈については、現地において(財)東大阪市文化財協会の松山氏のご指導・ご教授を賜った。
- ・註2：造構の断面形状については、以下に述べる2点に注目し、客観的な定義を心がけ、それに従い分類を行った。まず、造構の上面法面と深さの関係に注意し、上面幅に対して深さが大きいもの(深いもの)、等しいもの、小さいもの(浅いもの)の3通りに分類した。また、底面形状については、底面が平坦であるか、そうでないかに大別し、そうでない場合については、底面が丸みをもつか、点的なものかで分類を行った。具体的な分類と呼称については、表3を参照されたい。

表3 造構断面形状分類表

造構断面形状分類表		造構底面の形状		
造構の深さ	上面幅より深い	底面が平坦 深い長方形・深い逆台形・深い不定形	底面が曲線 U字形	底面が点 深いV字形
	上面幅と同じ	正方形・逆台形・不定形	半円形	逆正三角形
	上面幅より浅い	浅い長方形・浅い逆台形・浅い不定形	レンズ形	浅いV字形

- ・註3：造構内埋土については、それが人為的に形成されたものなのか、自然状態で形成されたものなのかに着目した。さらに、自然状態で形成されたものについては、既ね、その形成には水が関与していると推測できることから、その水が流水状態であったのか、静水状態であったのかを判別することを心がけた(表4を参照)。

表4 造構内埋土の着眼点

造構内埋土の着眼点	堆積構造	粒度組成	出土遺物の有無	遺物の出土状況	変形構造の有無	埋土の形成時期
人為的に形成された埋土	ブロック	淘汰不眞		人為的に包含されたものかどうか？出土状況に企画性が認められるか？		
自然状態で形成された埋土	流水状態 斜交ラミナなど	粗粒化		地盤の痕跡など		加工時 機能時 廃絶時
	静水状態	水平ラミナなど	粗粒化			

- ・註4：今回の調査で出土した遺物に関する参考文献を以下に記す。各時代の遺物の編年について、特に註記がない限り、以下の文献に準拠した。

縄文土器

- ・松尾信裕 1983「第IV章 考察 第1節 縄文時代から弥生時代の造構と遺物の検討 第1項 長原式土器深鉢A類にみる器形の変化」『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』(財)大阪市文化財協会

弥生土器

- ・寺沢 純・森岡秀人編 1989『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅰ－』
- ・寺沢 純・森岡秀人編 1990『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－』
- ・正岡龍夫・松本岩雄編 1992『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』
- ・菅原康夫・梅木謙一編 2000『弥生土器の様式と編年－四国編－』

古墳時代前期土器(古式土師器註5・註6・註7)

- ・寺沢 純 1986「論考 岐内古式土師器の編年と二・三の問題」「矢部遺跡－国道21号線桜原バイパス建設に伴う遺跡調査報告(Ⅱ)－」奈良県立橿原考古学研究所

- ・米田敏幸 1991「土師器の編年 複内」『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』雄山閣
- ・原田昌則 1993「Ⅱ 久宝寺遺跡(第1次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・若林邦彦 1999「第2節 河内平野南遺跡群における弥生後期～古墳前期土器の変遷」『河内平野遺跡群の動態 VII』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター

古墳時代中期～後期土器(土師器・須恵器)

- ・山邊昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- ・辻 美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する考察」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室
- ・佐藤 陸 2000「第V章 第2節 古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究第十一』(財)大阪市文化財協会

飛鳥～平安時代の土器(土師器・須恵器)

- ・古代の土器研究会編 1992『古代の土器 I 都城の土器集成』古代の土器研究会
- ・佐藤 隆 2000「第V章 第2節 古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究第十一』(財)大阪市文化財協会
- ・註5：本報告では、古墳時代以降の煮焼きの土器について、便宜上、古式土師器と土師器とに名称を区分している。つまり、未だ須恵器が出現していない古墳時代前期のものについては古式土師器と呼び、須恵器出現前後以降のものについては土師器とした。さらに古式土師器について、この内、古墳時代初頭に比定されるものを庄内式土器、前期に相当するものを布留式土器と呼称するほか、これらの土器が用いられた時代を、それぞれ庄内式期、布留式期とした。
- ・註6：弥生土器・古式土師器の形式名(器種名と同一)については、現段階で筆者が明確な定義を持っていない。したがって、相対的にI線部分が広いものは広口の、頸のながいものについては長頸の、頸のないものについては無頸の、などのように形容詞をつけて表現した。つまり、その表現には多分に筆者の主観が入っており、他の研究者がそれぞれ定義されている形式分類と異なる点が多いと指摘される。
- ・註7：古式土師器の編年観については、上記の文献を参考にした。ただし時期区分については、各研究者により異なり、統一が図られているわけではない。したがって本報告では庄内式期、布留式期とともに古・新の二段階に分けて編年を行った(庄内式期古段階・庄内式期新段階・布留式期古段階・布留式期新段階)。つまり庄内式期古段階とは、いわゆる庄内式土器が確立されているのにも関わらず、弥生土器の系譜を持つ器種がまだ混在する段階のもの、庄内式期新段階とは、庄内式土器のみで様式が構成されている段階のもの、布留式期古段階とは、所謂布留式土器が存在しつつ、依然として庄内式土器が共存する段階のもの、布留式期新段階とは布留式土器のみで様式が構成される段階のものをいう。
- ・註8：韓式系土器の定義は以下の文献に従った。
 - ・植野浩三 1987 I. 韓式系土器の名称と分類 韩式系土器の名称』『韓式系土器研究 I』韓式系土器研究会
- ・註9：総合科学株式会社の水谷氏に花粉分析を依頼し、玉稿を賜った。詳細については本書の第4章を参照されたい。
- ・註10：(財)東大阪市文化財協会松田氏の御教示による。

(参考文献)

- ・吉岡 哲 1988 「<考古編>第3章 弥生時代の八尾」『増補版 八尾市史(前近代)本文編』八尾市史編集委員会・八尾市役所
- ・寺川史郎・金光正裕 1987 「第Ⅲ章 まとめ」『久宝寺北(その1~3)近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視・松岡良憲・今村道雄 1987 「久宝寺南(その1)近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・瀬和大 1987 「第Ⅲ章 調査の成果-検出遺構-」『久宝寺南(その2)一久宝寺・加美遺跡の調査-近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)大阪文化財センター
- ・後藤信義・本田奈都子 1996 「八尾市亀井所在 久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書 -JR久宝寺駅舎・山田通路設置に伴う-」(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・後藤信義・島崎久恵・長田芳子 1998 a 「八尾市渋川所在 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅰ -一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査-」(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・米山敏幸 1990 「18. 久宝寺遺跡発掘調査概要(85~91)」『八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』
- ・後藤信義・島崎久恵 1998 b 「IV. 調査成果 2. 96-1トレーナー」『八尾市渋川所在 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ -一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査-』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・趙 哲済 1995 「第Ⅱ章 層序」『大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告書 1988年度大阪市長吉瓜破地区 小字地区画整理事業施工に伴う発掘調査報告書』(財)大阪市文化財協会
- ・赤木克視・西村 歩・酒井泰子・秋山浩三・瀧川貴文 2001 『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第60集 八尾市渋川所在 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ -一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査-』(財)大阪府文化財調査研究センター

第4章 久宝寺遺跡第26次調査(KH99-26)に伴う花粉分析

総合科学株式会社 水谷陸彦

第1節 調査概要

1. 業務名

久宝寺遺跡第26次調査(KH99-26)に伴う花粉分析

2. 目的

八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業に先立って、継続的に発掘調査が行われている。調査地全体では、弥生時代後期以降から現在までに堆積した地層が主にみられる。今回の第26次調査では、最終掘削レベルである現地表下6m付近において人為的擾乱層が認められ、さらに下位の地層に遺構が存在する可能性があると判断された。この可能性を花粉分析による古環境の推定から考える。

3. 調査地

大阪府八尾市神武町93-1 (第21図・第22図参照)

4. 履行期間

平成11年8月10日～平成11年10月30日

5. 業務受託者

総合科学株式会社 〒540-0019 大阪市中央区和泉町1-1-14 (ワイエムピー谷町ビル)
TEL 06-6945-0988

6. 分析担当者

水谷陸彦

7. 分析試料の数量

花粉分析：7点

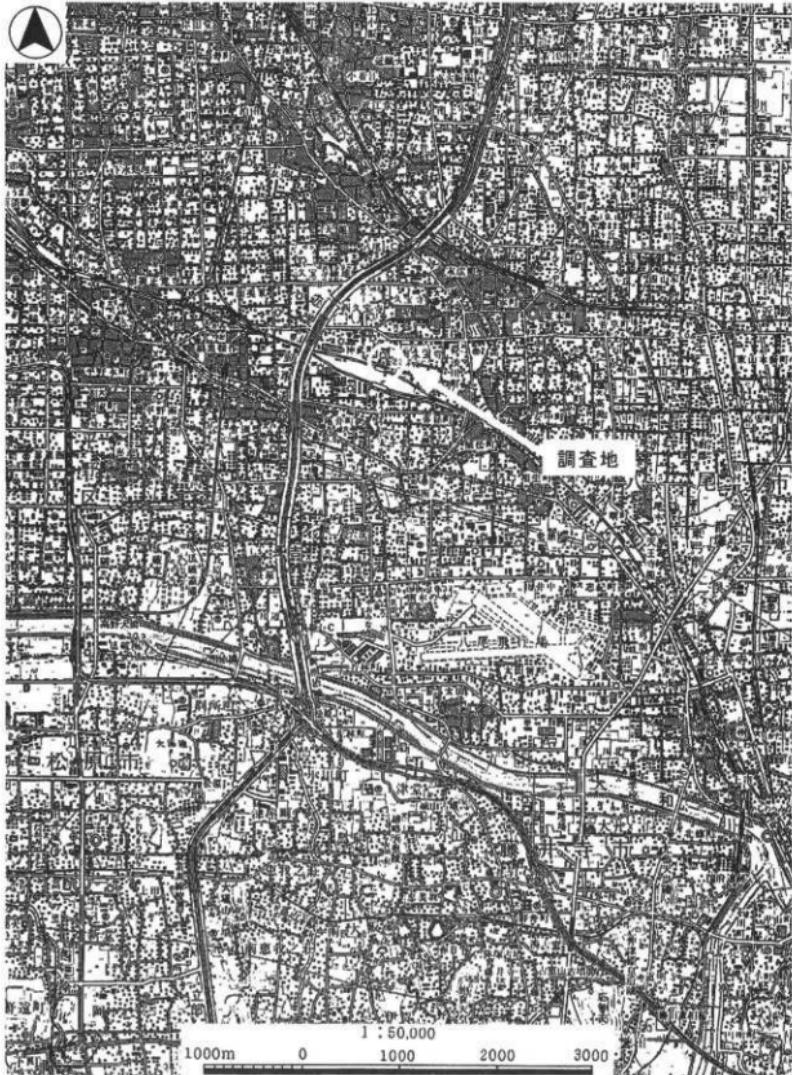
8. 分析試料の採取位置

分析試料の採取位置を第23図と第24図に示す。

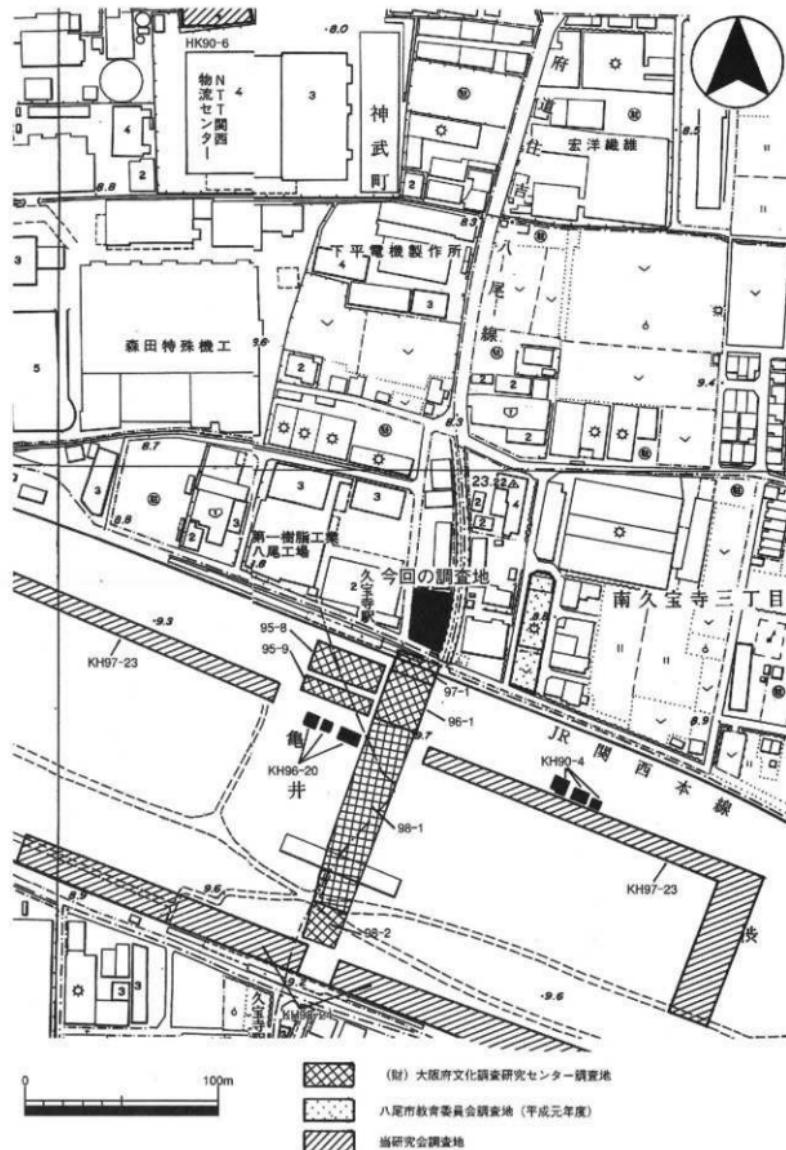
第2節 分析方法

試料からの花粉化石抽出およびプレパラートの作成は、以下の手順で行った。

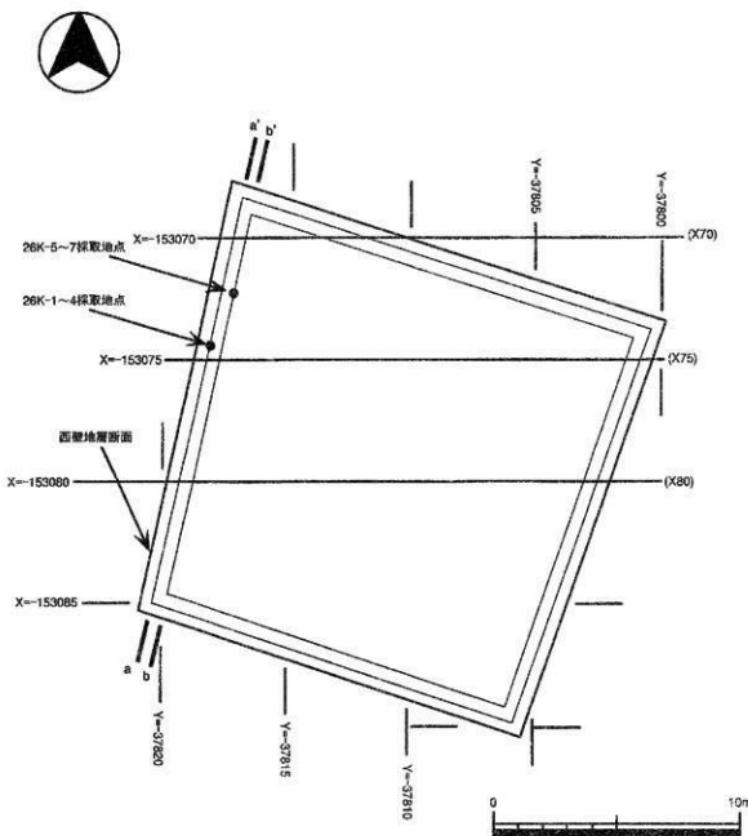
- (1) 濡潤重量で20g程の試料を10%水酸化カリウム水溶液に室温で1日浸す。
- (2) 砂粒および植物片の除去。
- (3) 傾斜法により粘土鉱物およびフミン酸の除去。
- (4) 蒸発皿処理によるシルト粒および植物片の除去。
- (5) 塩化亜鉛(飽和水溶液)による重液分離(800r.p.m.で15分、その後2000r.p.m.で10分間、遠心分離)。
- (6) フッ化水素酸処理(室温で1日)。
- (7) アセトリシス処理(1分間湯煎)。



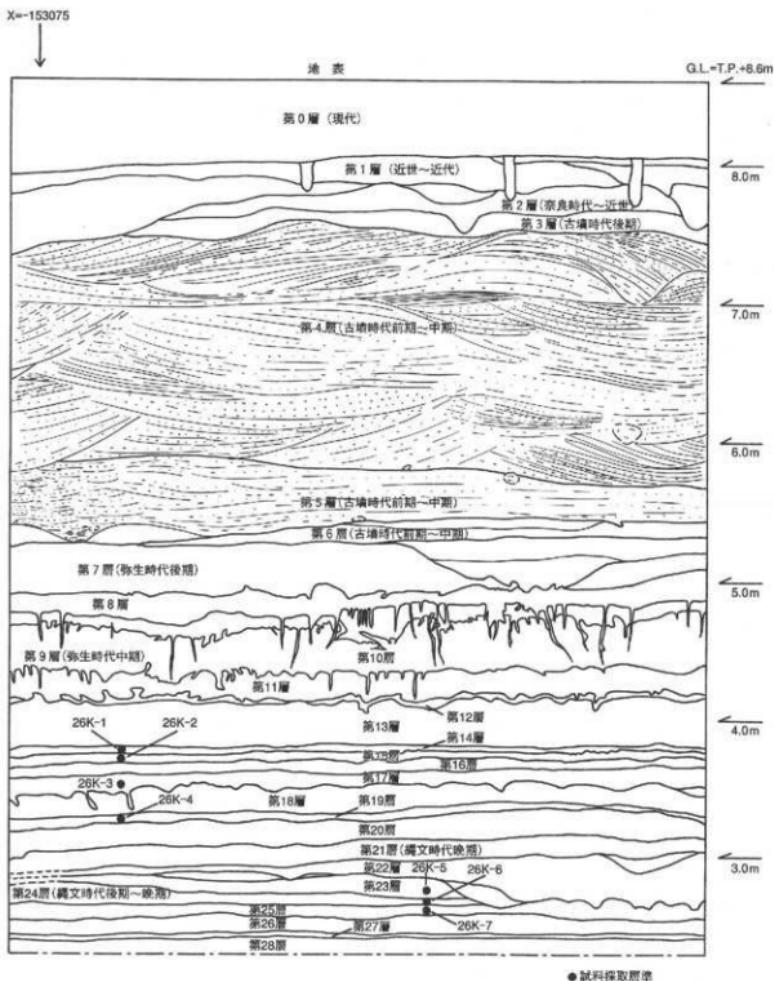
第21図 調査位置図 ($S = 1 / 50000$)



第22図 調査地周辺図($S = 1/2500$)



第23図 調査区平面図 ($S = 1/200$)



第24図 西壁地層断面図

(8) グリセリジエリーで封入。

(9) ネイルエナメルで密封。

上記の方法で各試料2~5枚のプレパラートを作成した。花粉の同定は、オリンパスの生物顕微鏡(BH2)で主に400倍(接眼10倍×対物40倍)、必要に応じて1000倍(接眼10倍×対物100倍)の鏡下で行った。集計はメカニカルステージを用いて木本花粉の総数が200個を超えるまで同定・計数を行い、その過程で検出される草本花粉やシダ・コケ胞子についても同定・計数した。出現率の計算は、木本花粉の総数を基準として行った。

第3節 分析結果

花粉化石の産出状況を表5に、花粉ダイアグラムを第25図に、産出頻度が低かったタクサを表6に示す。

表5 分析重量と花粉化石産出状況

試料番号	分析重量(湿潤重量) g	産出状況	試料番号	分析重量(湿潤重量) g	産出状況
26K-1	28.13	○	26K-5	27.00	○
26K-2	22.24	○	26K-6	21.00	○
26K-3	35.01	△	26K-7	24.78	○
26K-4	30.47	△			

○:木本花粉200個以上 ○:木本花粉50~200個未満 △:木本花粉50個未満

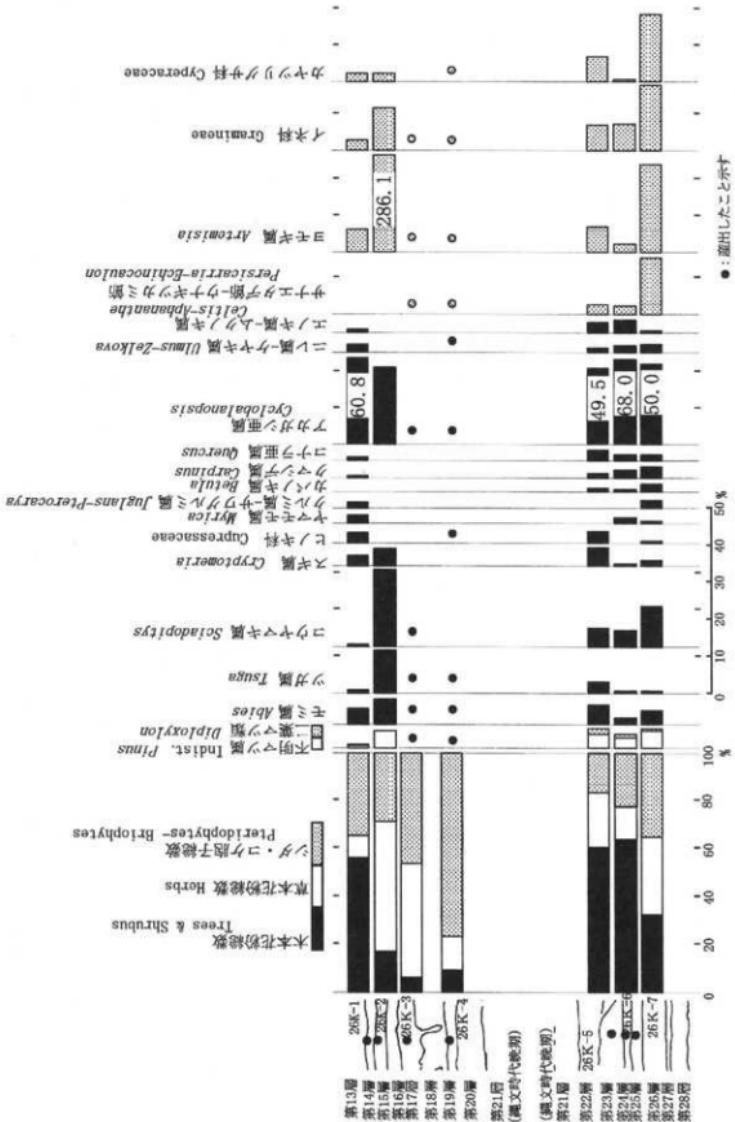
今回採取したすべての試料から花粉化石は産出した。ただし、26K-3と26K-4では、木本花粉の総数が20個未満と少なかった。

産出した木本花粉として、アカガシ亜属(*Cyclobalanopsis*)が多く、木本花粉の総数が少なかった26K-3と26K-4でも産出した。これに、広葉樹の花粉としてはコナラ亜属(*Quercus*(*Lepidobalanus*))ヤクマシデ属(*Carpinus*)、ニレ属・ケヤキ属(*Ulmus-Zelkova*)、エノキ属・ムクノキ属(*Celtis-Aphananthe*)などが、針葉樹の花粉としてコウヤマキ属(*Sciadopitys*)やモミ属(*Abies*)、ツガ属(*Tsuga*)、マツ属(*Pinus*)、スギ属(*Cryptomeria*)などが伴われた。

草本花粉としては、ヨモギ属(*Artemisia*)がもっとも高率に産出し、イネ科(*Gramineae*)やカヤツリグサ科(*Cyperaceae*)が伴われた。割合は低いが、26K-5や26K-6、26K-7でコウホネ属(*Nuphar*)とガマ属(*Typha*)が産出し、26K-5の1試料であるがヒシ属(*Trapa*)も産出した。

胞子では、オシダ科・チャセンシダ科(*Aspidaceae-Aspleniaceae*)やウラボシ科(*Polypodiaceae*)、他の単条溝胞子、三條溝胞子が産出した。また、花粉でも胞子でもないが、土壤菌が26K-1と26K-2で高率に産出した。

第25図 久宝寺遺跡第26次調査 花粉ダイアグラム



●：検出したことを示す

表6 久宝寺遺跡第26次調査 産出頻度が低かった花粉化石その①

Ophioglossum	ハナヤスリ属	-	0.6
Typha	ガマ属	-	-
Carduoideae	キク科	-	●
Gymnostomma	アマチャズル属	-	-
Nymphaeoides	アサザ属	-	-
Umbelliferae	セリ科	-	-
Trapa	ヒシ属	-	0.6
Leguminosae	マメ科	-	2.6
Rosaceae	バラ科	-	2.8
Thalictrum	カラマツツウ属	-	-
Douglasia	カタバミ属	-	-
Mughoz	コウホネ属	-	●
Bistorta	イブキトラノオ属	-	-
Symplocos	ハイノキ属	-	-
Ericaceae	ツツジ科	1.3	0.6
Eleagnus	グミ属	-	-
Tilia	シナノキ属	-	-
Corynaria	ヤブガラシ属	-	-
Partbenocis	ツク属	-	-
Aesculus	トチノキ属	-	-
Acer	カシノデ属	-	-
Phellodendron	キハダ属	-	-
Melilotus	アカメガシワ属	-	-
Castanopsis-Passnia	シイ属-マテバシイ属	-	-
Castanea	クリ属	-	-
Fagus	ブナ属	-	-
Corylus	ハシバミ属	-	-
Alnus	ハンノキ属	-	●
Salix	ヤナギ属	-	-
Podocarpus	マキ属	-	-
Sample No.	試料番号	26K-1 26K-2 26K-3 26K-4 26K-5 26K-6 26K-7	0.1 2.8 ● 0.5 0.5 0.5 0.9
		- - - - - - -	7.0 - - - 2.0 0.5 0.9 0.9
		- - - - - - -	2.8 - - - 1.0 0.9 0.9 0.9
		- - - - - - -	0.1 - - - 0.5 0.5 0.1 -

●：抽出したことがある

表 6 久宝寺跡26次調査 産出頻度が低かった花粉分析その②

	土壤面						
trilete spores 三條藻胞子	-	0.6	7.7	0.6	16.0	14.7	32.7
monolete spores 単条藻胞子	-	33.3	16.7	-	53.8	58.3	125.0
Musci コケ	-	-	-	-	●	●	●
Polypodiaceae ウラボシ科	-	16.6	7.7	0.6	-	-	-
Aspid.-Aspl. オシダ科-チャセンシダ科	-	33.3	16.7	-	53.8	58.3	125.0
Osmundastrum ヤマドリゼンマイ属	-	-	-	-	●	●	●
Osmunda ゼンマイ属	-	-	-	-	●	●	●
Urostachys トウゲシバ属 (ヒモランtype)	0.6	1.9	-	-	-	-	-
Urostachys トウゲシバ属 (トウゲシバtype)	-	2.8	-	●	-	-	-
Scirpidium フユノハナワラビ属	-	2.8	-	●	-	-	-
Betrichium ナハワラビ属	-	-	-	0.5	0.5	4.2	4.6
Sample No. 試料番号	266-1	266-2	266-3	266-4	266-5	266-6	266-7
	-	-	-	-	-	-	0.9

第4節 第14層～第25層における遺構存在の可能性について

1. 古植生

26K-3と26K-4で木本花粉の産出が少なかったり各タクサにおいて試料ごとにその産出の割合は多少変動しているが、アカガシ亜属が高率でコナラ亜属ヤクマシデ属、ニレ属・ケヤキ属、エノキ属ムクノキ属、コウヤマキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属などが伴われる花粉化石群集の特徴は、26K-1～7で概ね同じである。

26K-1～7の試料を採取した地層が堆積した時代、アカガシ亜属の花粉が高率でクリ属(*Castanea*)やシイ属・マテバシイ属(*Castanopsis-Pasania*)の花粉が伴われることから、今回の調査地の周りにはアカガシ亜属の優占する常緑広葉樹林があったと考えられる。層相から調査地をほぼ東西方向に流れる河川があったと推定されているが、花粉においてもニレ属・ケヤキ属とエノキ属ムクノキ属が低率ながら安定して産出していることから、河畔林があったと考えられる。また伴出するコウヤマキ属、モミ属、ツガ属、スギ属の花粉から、後背地の山には中間温帯の針葉樹林があったと推定される。

試料を採取した低地の局地的な古植生を考えると、池などに生育するコウホネ属やヒシ属と、湿地性植物のガマ属の花粉が産出することから、26K-5～7の試料を採取した地層の堆積時には、滞水域のある湿地があったことが伺える。その後、花粉があまり含まれない26K-3と26K-4、そして26K-1、26K-2と湿地性植物の花粉は産出せず、26K-2でヨモギ属が高率であったり、オシダ科・チャセンシダ科や土壌菌が高率であることから、26K-1～4の試料を採取した地層の堆積時に滞水域はなくなり、その下位の地層の堆積時と比べて乾燥した草地があったと考えられる。

2. 遺構存在の可能性について

栽培植物ではないかと思われる花粉の産出などといった、遺構の存在を示す積極的な花粉分析結果はでなかつた。ただ、花粉分析結果から推定された古植生にもとづくと、分析をした7層のうち比較的乾燥した草地が推定され、土壌に生息する土壌菌がもっとも高率に産出することから、第15層と第14層において遺構がみつかる可能性はある。

層相の観察からもっとも遺構の可能性が高いと判断されたのは、第24層である。第24層は、径が1～5cmで角張っているブロック粘土を含む粗粒砂混じりの粘土で、擾乱を受けたことが伺える。ブロック粘土の径が大きく角張っていることから、この擾乱は水田耕作による可能性が高いと考えられた。しかし、花粉分析結果では、第24層から採取した26K-6の試料においてイネ科の花粉は産出しているが高率ではなく、花粉粒の径が40 μm よりも小さいという形態からイネ属の花粉であるとはいえない。また、第24層を含めて第25層、第23層の地層が堆積した時代の試料採取地の低地は、滞水域のある湿地であったと推定される。これらのことから、第24層における水田耕作の可能性はないと考えられる。

第5節 まとめ

今回の花粉分析では、以下のことが明らかになった。

- (1) 調査地の周りにはアカガシ亜属の優占する常緑広葉樹林があり、調査地を東西に流れていた河にはニレ属・ケヤキ属やエノキ属ムクノキ属などの河畔林、そして後背地の山

にはコウヤマキ属、モミ属、ツガ属、スギ属をどの中間温帯の針葉樹林があったと考えられる。

- (2) 分析をした層準の下半部にあたる第25層、第24層、第23層の地層が堆積する時代、試料を採取した低地には滯水域のある湿地があったと考えられる。
- (3) 分析をした層準の上半部にあたる第19層、第17層、第15層、第14層の地層が堆積する時代、試料を採取した低地に滯水域はなくなり、その下位の地層の堆積時と比べて乾燥した草地があったと考えられる。
- (4) 第15層と第14層において遺構がみつかる可能性はある。
- (5) 第24層における水田耕作の可能性ないと花粉分析からは考えられる。

表7 花粉写真対応表

写真(1)		写真(2)	
1	アカガシ属 (26K-7)	1	イネ科 (26K-7)
2	ニレ属-ケヤキ属 (26K-7)	2	カヤツリグサ科 (26K-7)
3	エノキ属-ムクノキ属 (26K-7)	3	ガマ属 (26K-7)
4	ヤマモモ属 (26K-7)	4	アマチャヅル属 (26K-7)
5	二葉マツ類 (複数管束重属) (26K-6)	5	キク重科 (26K-6)
6	ツガ属 (26K-6)	6	ヨモギ属 (26K-3)
7	コウヤマキ属 (26K-7)	7	サヌユタデ属-ウナギツカミ節 (26K-7)
8	スギ属 (26K-7)	8	オシダ科-チャセンシダ科 (26K-3)
9	カバノキ属 (26K-6)	9	ウラボシ科 (26K-7)
10	ブナ属 (26K-7)	10	トウゲシバ重属 (ヒモランtype) (26K-7)
		11	ハナヤスリ属 (26K-7)



1



2



3



4



5



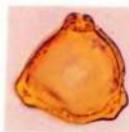
6



7



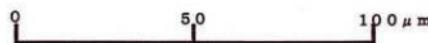
8



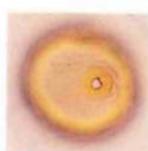
9



10



写真(1) 花粉化石(1)



1



2



3



4



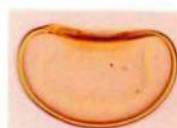
5



6



7



8



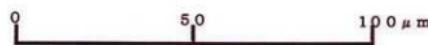
9



10

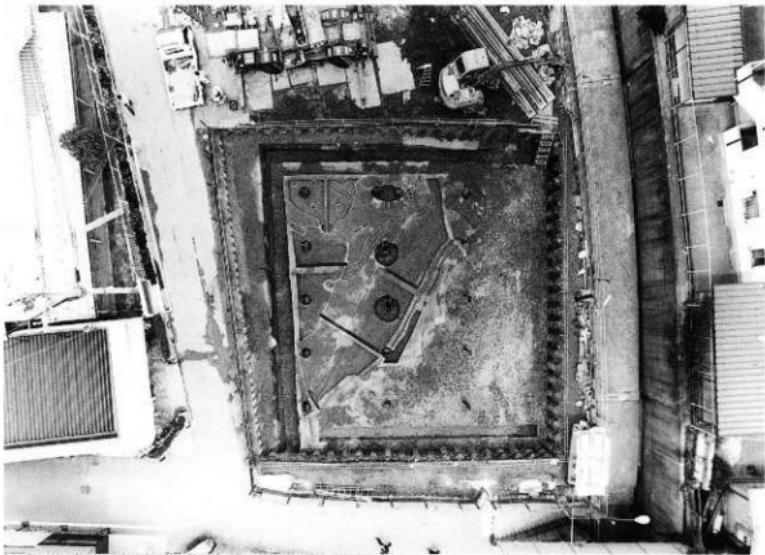


11

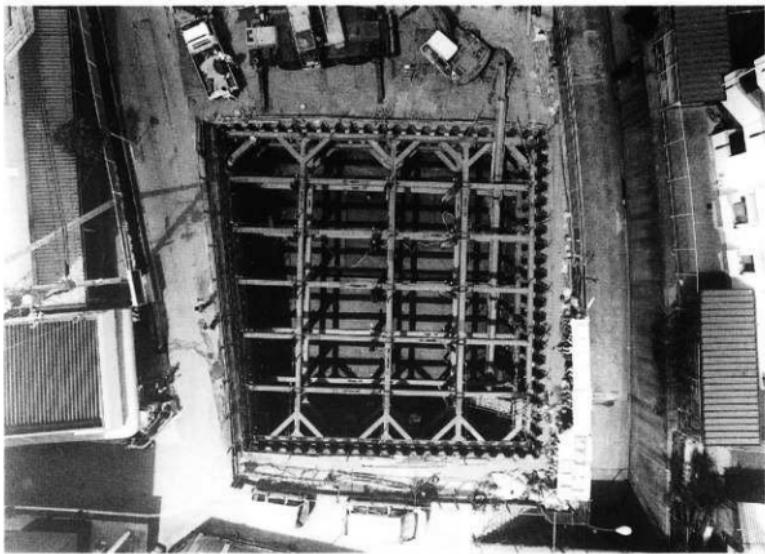


写真(2) 花粉化石(2)

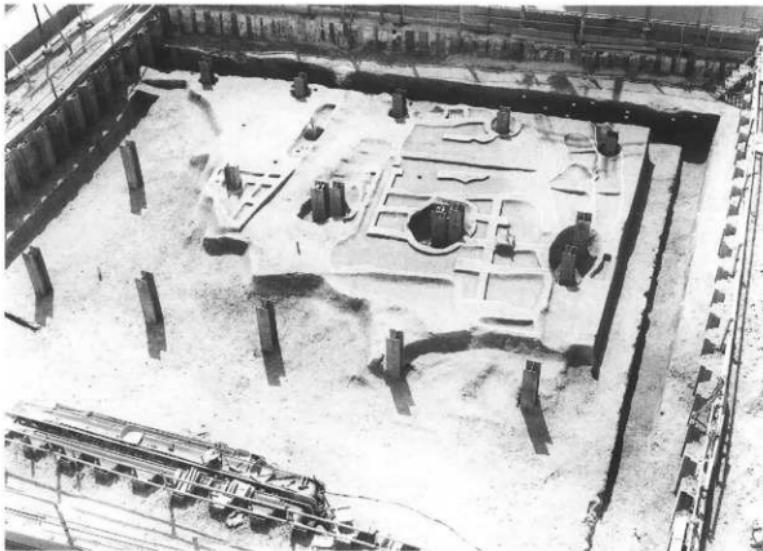
図 版



第2面全景（クレーンより撮影：上が北）



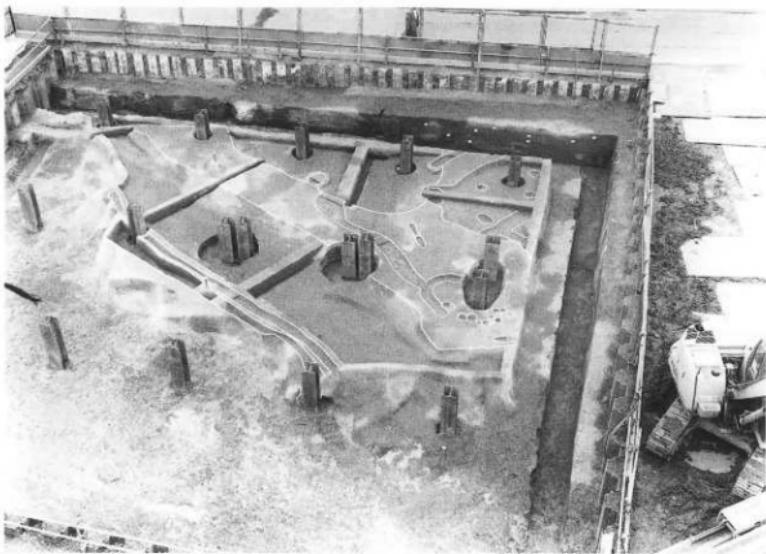
第4面全景（クレーンより撮影：上が北）



第1面全景（東から）



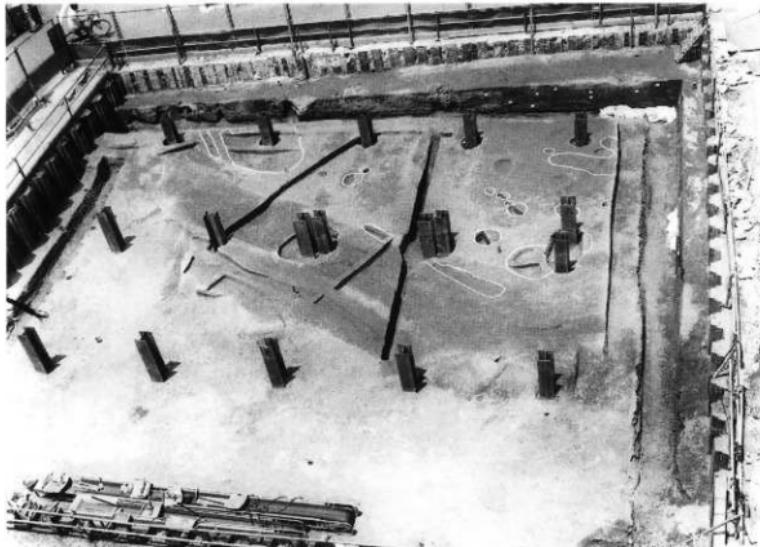
第1面全景（北から）



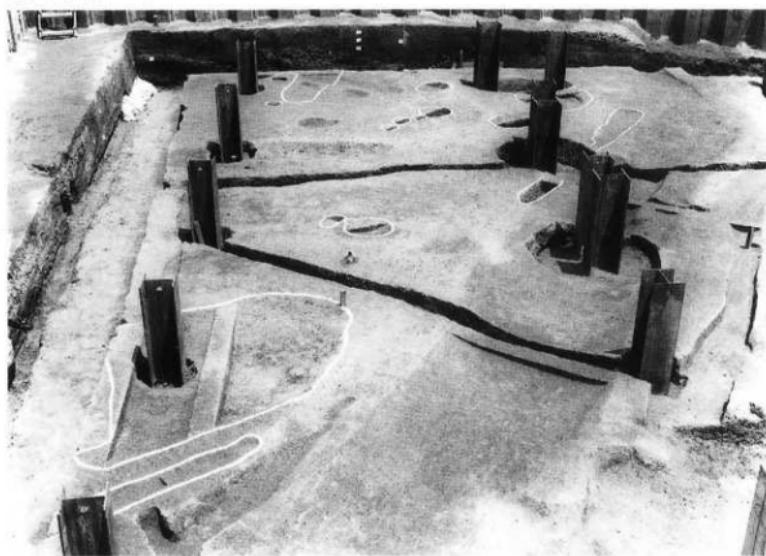
第2面全景（東から）



第2面全景（北から）



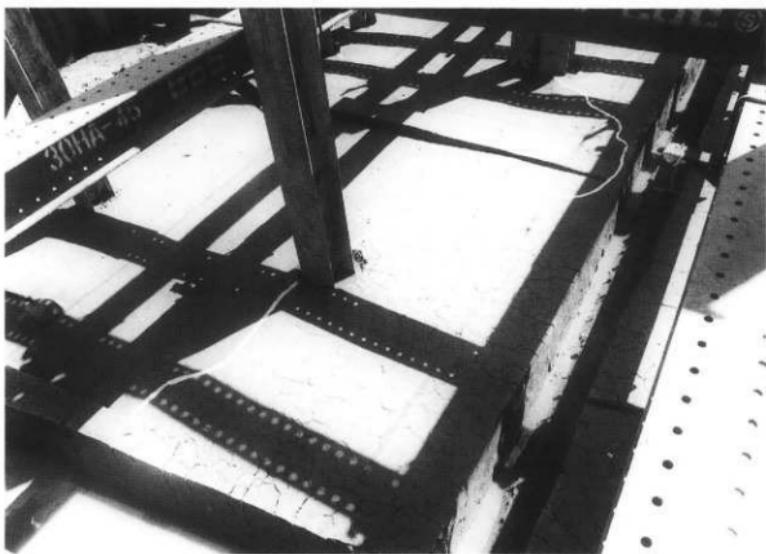
第3面全景（東から）



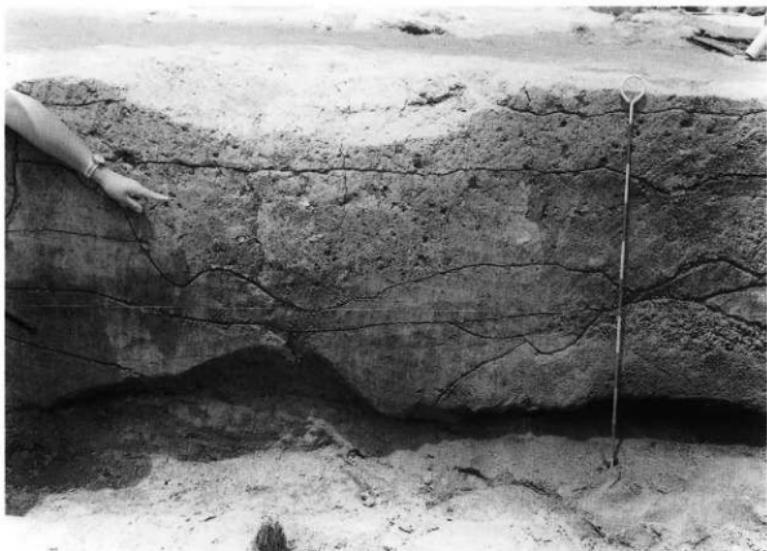
第3面全景（南から）



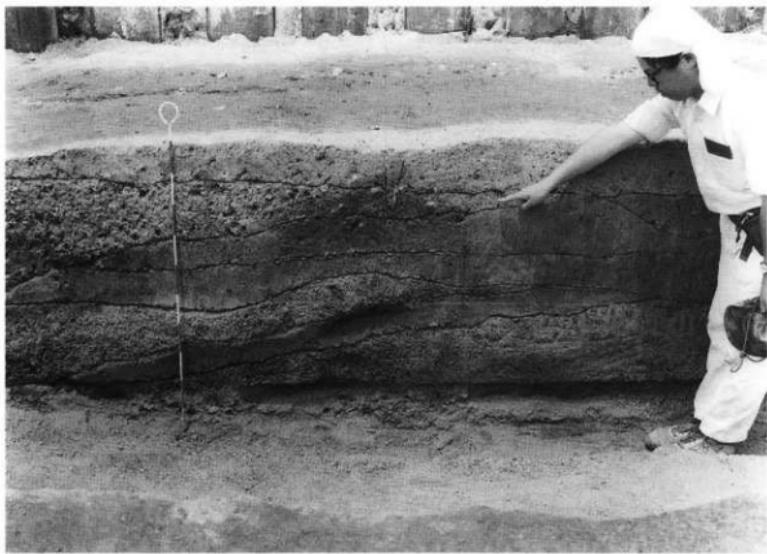
N R 401検出状況（東から）



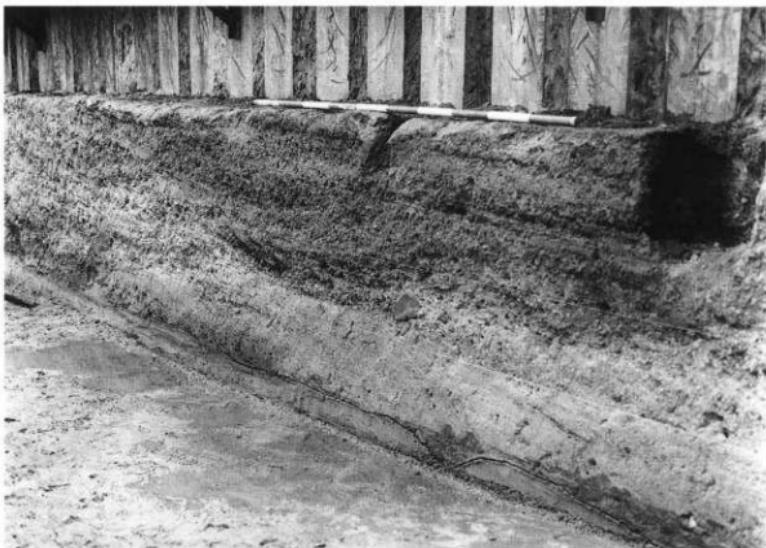
N R 401検出状況（西から）



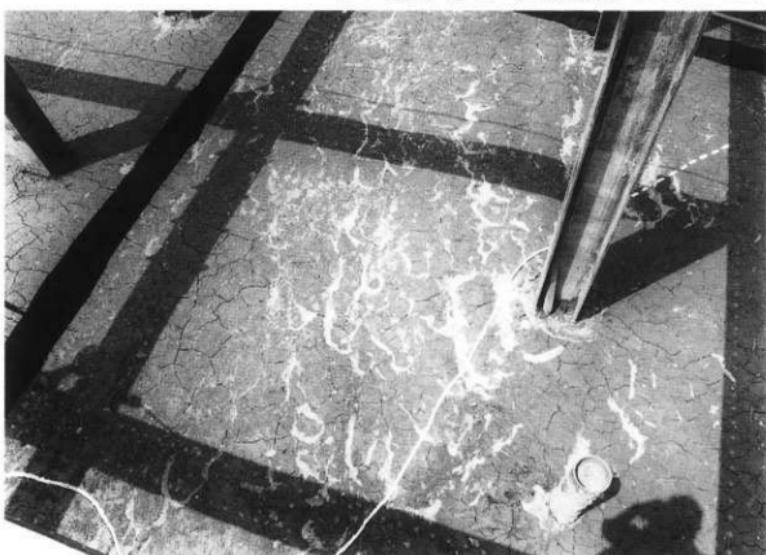
西壁地層斷面 SK 201埋土堆積狀況



西壁地層斷面 SK 203埋土堆積狀況



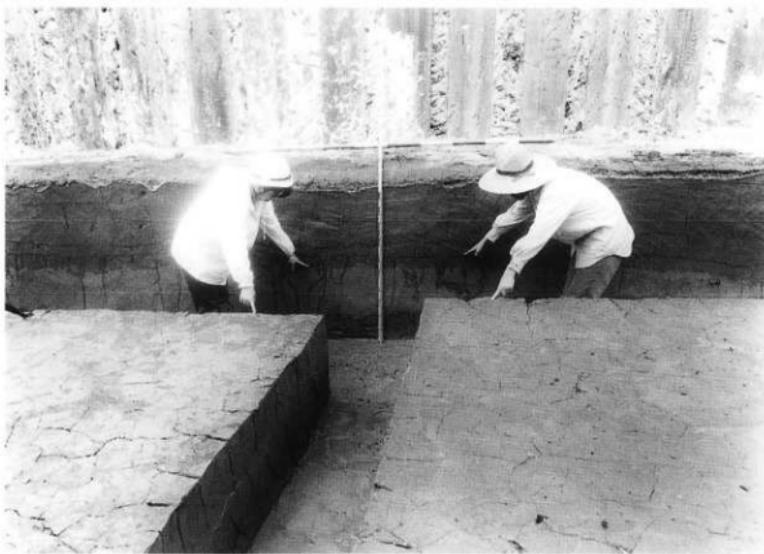
西壁地層断面 第4層・第5層堆積状況 (T.P.+5.2~6.6m)



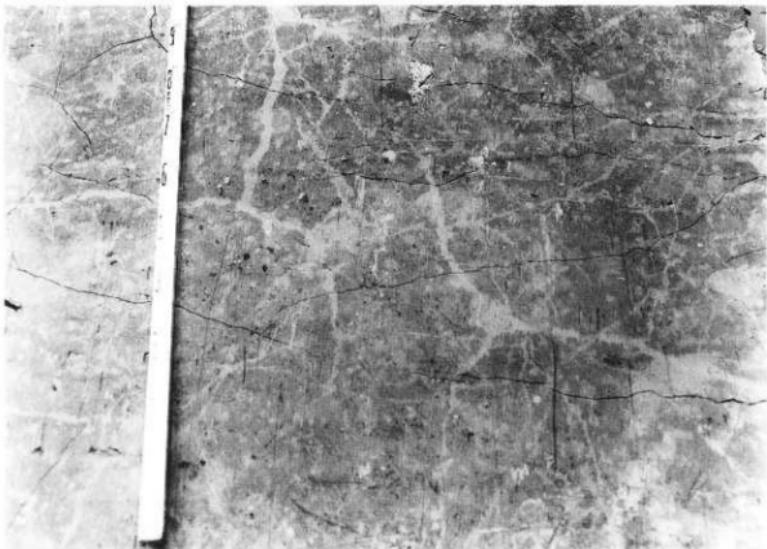
第6層下面 グループキャスト検出状況 (南から)



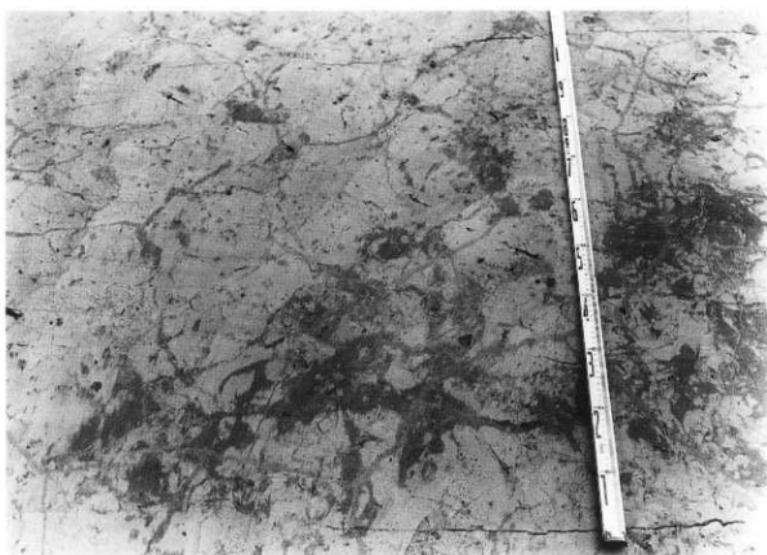
西壁地層断面 第7層～10層堆積状況 (T.P.+4.0～5.2m)



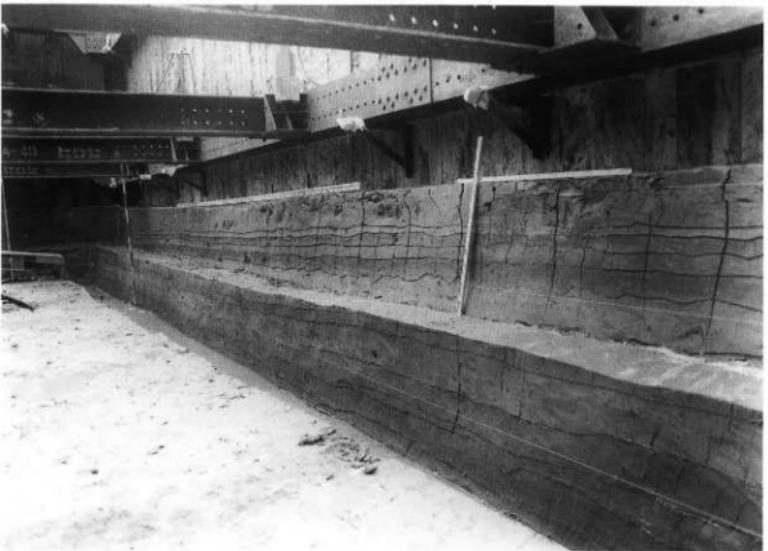
西壁地層断面 第8層・第9層堆積状況 (右の人は第8層下面、左の人は第9層下面の平・断面をそれぞれ指す)



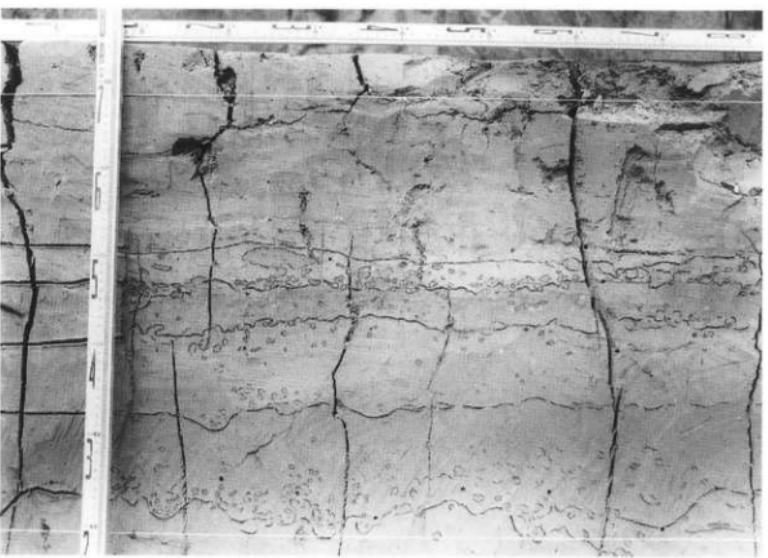
第8層下面 地震痕跡？検出状況（東から）



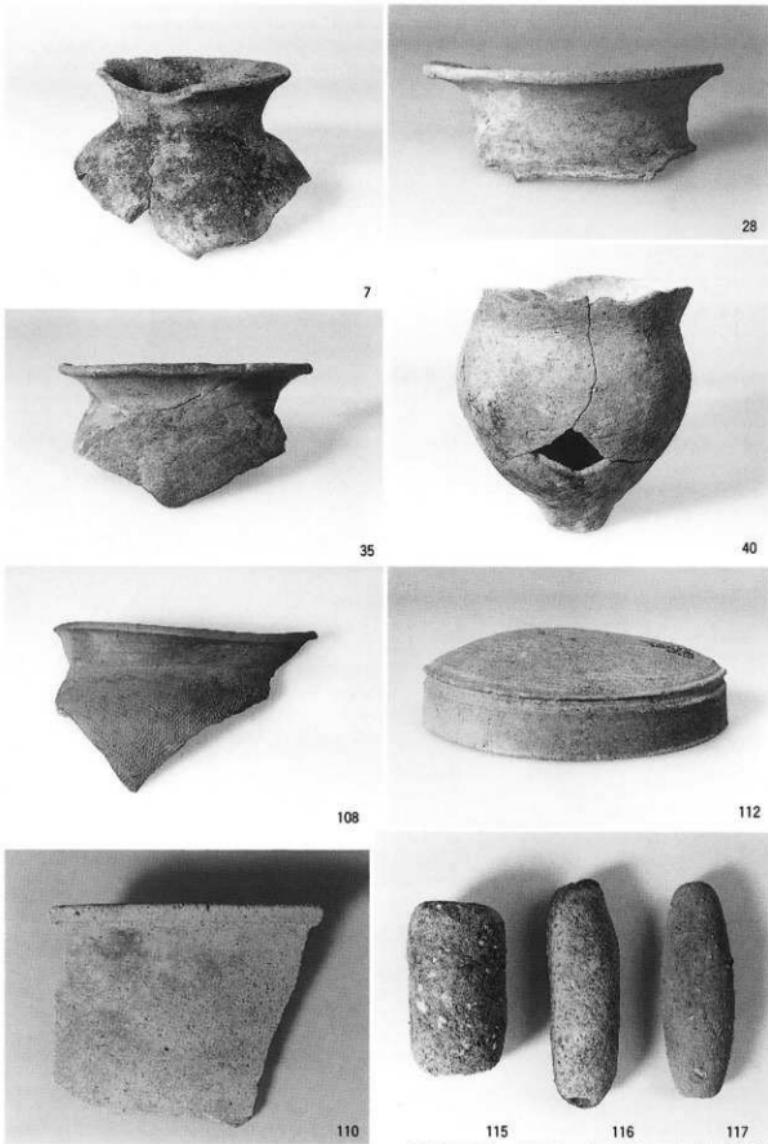
第9層下面 地震痕跡？検出状況（東から）



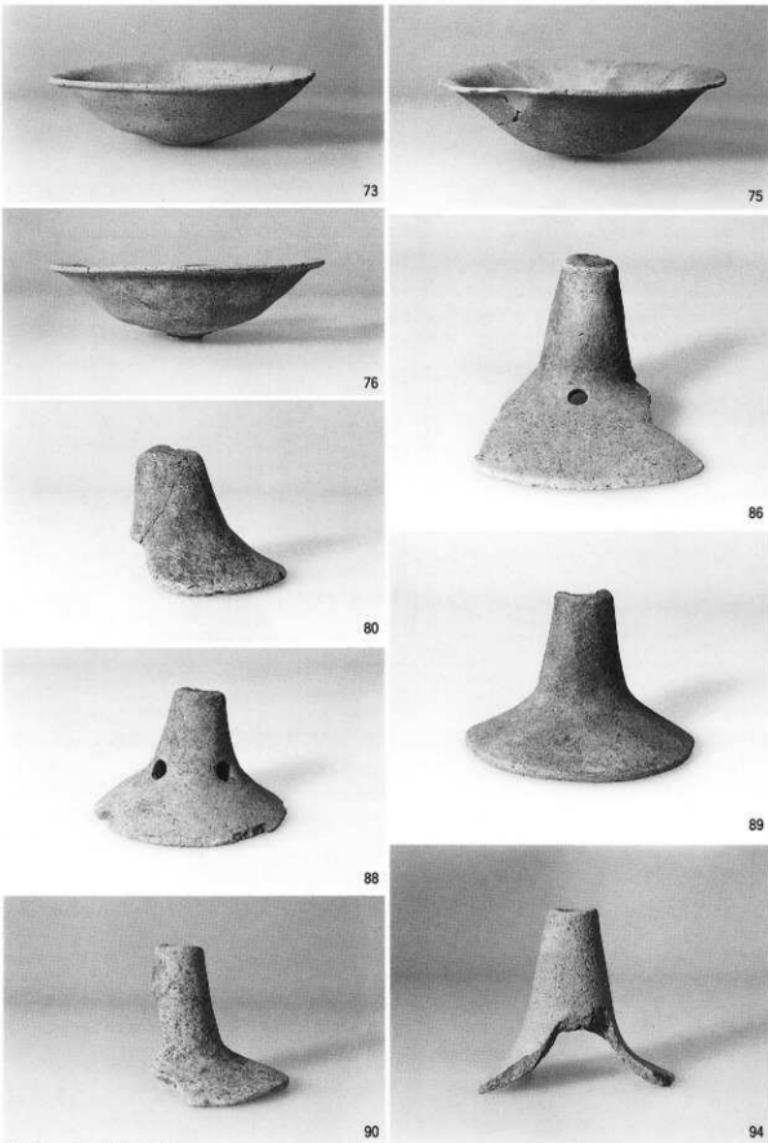
西壁地層断面 第13層～28層堆積状況 (T.P.+2.7～4.0m)



西壁地層断面 第13層～18層堆積状況 (T.P.+3.5～4.0m)



S D 206 (7)・第4層～6層（その他）内出土遺物



第4層～6層内出土遺物



95



96



97



98



99



100

第4層～6層内出土遺物



2



17



18



21



107



109



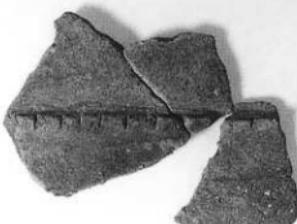
16



19



126



127

S K201 (2) · 第4層～6層 (16～19・21・107・109) · 第7層 (126) · 第9層 (127) 内出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	ざいだんはうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく70
副書名	久宝寺遺跡 一八尾市神武町93-1の道路築造工事に伴う久宝寺第26次発掘調査報告
卷次	
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	70
編著者名	岡田清一・樋口 篤・水谷隆彦
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡所	ふりがな 在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きゅうほうじゆせき 久宝寺遺跡 (第26次調査)	おおさかみやおしじんむちょうほく 1もない 大阪府八尾市神武町93-1地内	27212	—	34度 36分 47秒	135度 35分 44秒	19990323 ~ 19990820	309	道路築造工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第26次調査)	湿地帯	弥生時代前期以前	地層		縄文時代後期・晚期・ 弥生時代前期に比定される暗色帯を確認した。
	湿地帯	弥生時代中期	地層	縄文土器	弥生時代中期に相当する暗色帯を確認した。
	湿地帯	弥生時代後期	地層	弥生土器	
	河川	古墳時代初頭～中期	地層	縄文土器・弥生土器・ 古式土師器・土師器・ 須恵器・韓式系土器・ 土鋸	南東～北西方向に流れていた河川の一部を検出した。
	居住域	古墳時代後期	土坑・溝		
	居住域	奈良時代～近世	土坑・溝	土師器・陶磁器	
生産域	近世～近代	鳥糞・不明遺構	土師器・石製品		

財團法人八尾市文化財調査研究会報告70

久宝寺遺跡

—八尾市神武町93-1 の道路築造工事に伴う久宝寺遺跡第26次発掘調査報告—

発行 平成14年3月
編集 財團法人八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX(0729) 94-4700

印刷 梅近哉印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 書籍用紙 <70Kg>
図版 マットアート <135Kg>

